

第六條 第三類證券印紙貼用ノ帳簿期限相満餘白ノ紙數之レアルトテ第三則第四條ヲ犯シ更ニ證券印紙ヲ貼用セス猶附込候者ハ脱税高(譬證書上同斷)ノ四倍過料タル事

第七條 諸證書帳簿ニ證券印紙ヲ不足ニ貼用セシモノハ其減税高ノ拾倍其證書受取タル者減税高五倍ノ過料タルヘキ事

第八條 規則ニ從テ貼用セシ諸證書帳簿ノ證券印紙ニ調印セサル者ハ三拾圓以下ノ過料タルヘキ事

但其調印セザル證書ヲ受取タル者ハ渡主ニ科スル半高ノ過料タルヘキ事

第九條 證券印紙ヲ貼用セサル歟或ハ貼用ソ印紙ニ調印セサル歟又ハ界紙可相用証書ニテ界紙ヲ用ヒサル證書ヘ證人ニ相立又ハ奥書等致シ候者ハ二拾五圓以下ノ過料タルヘキ事

第十條 官許賣捌所ノ外ニ於テ第一則第四則ニ背キ證券(○印

紙○界紙)ヲ賣捌致シ候者ハ其品取揚ケ既ニ賣捌タル(○印紙○界紙)代ノ百倍其情ヲ知テ之ヲ買フ者ハ其品取揚ケ(○印紙○界紙)代ノ五十倍過料タルヘキ事

第十一條 證券印紙貼用致スヘクシテ全ク貼用無之諸帳簿ニ調印イタシ候者ハ其人毎ニ帳簿主ヨリ取立候過料高百分ノ一ツハ各過料タルヘキ事

第十二條 一旦相ヒ用ヒ調印セシ證券印紙ヲ再用セントシテ之ヲ剥取り調印ヲ洗滅スル者或ハ洗滅シタル者ト知テ之ヲ再用スル者又ハ之ヲ賣買スル者ハ六拾圓以下ノ過料タルヘキ事

第十三條 證券(○印紙○界紙)ヲ贗造スル者又ハ購造セシ品ト知テ之ヲ賣買スル者ハ都テ九十圓ノ以下ノ過料タルヘキ事  
第十四條 前數條ニ掲グル處ノ犯則ハテ見届ケ訴出ル者アルキハ事實取糺ノ上相違ナキニ於テハ其賞トシテ其過料金ノ半高



ヲ下サルヘキ事

△明治八年第五十一號布告ヲ以テ左ノ通り第十五條ヲ增補ス

●第拾五條 證券印紙貼用スヘキヲ界紙ニ認メ渡ス者ハ減稅高ノ十倍其受取タル者ハ減稅高五倍ノ過料タルヘキ事

第五則 附錄

第一條 諸証書ニ外國貨幣ヲ以テ記載セル分ハ其節ノ相場ヲ以テ内國通貨ニ計算シ其高ニ應シ印紙貼用致スヘキ事

第二條 公債証書類ハ其証書面ノ金高ニ拘ハラズ賣買ノ正金高ヲ以テ計算シ其高ニ應シ印紙貼用致スヘキ事

第三條 官ノ金穀諸拜借証文ノ儀衆庶一般ノ災厄ヨリ起レル救助ニ關スル分ハ(○印紙○界紙)ヲ用フルニ及ハサレモ其餘ノ諸拜借ハ總テ借用金穀証文規則ノ通タルヘキ事

第四條 印紙貼用アル諸証書ヲ事故アリテ書改候節ハ新証書ヘ

更ニ印紙貼用致スヘキ事

第五條 凡ソ諸證書帳簿ニ誤リテ過剩ノ印紙ヲ貼用セル者ハ其證ニ於テ妨ケナキ事

第六條 諸證書ヲ差戻シ又ハ諸切手類現品引替ノ節戻シ主ニ於テ嘗テ調印アル印紙面ヲ塗消シ或ハ引裂キ相戻スヘキ事

第七條 各所問屋テ繼テ送致スル荷物送狀ヲ途中(宿湊問屋)ニ於テ其儘經送候節ノ添狀ハ印紙貼用ニ及ハサレモ右荷物ヲ引分ケ各別ニ差送候節ノ新規送狀ハ規則ノ通印紙貼用可致事

第八條 爲取換約定書ノ類ハ双方トモ印紙貼用致スヘキ事

第九條 (明治七年第十九號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス) 院省使府縣廳ニ於テ銀行又ハ爲換方等へ貢金其他官金相預候節預リ金證文並ニ預リ金通帳界紙ヲ用フルニ及ハサル事

第十條 (明治八年第四號布告ヲ以テ削除ス故ニ略ス)



第十一條 印稅規則ニ相觸候證書並ニ帳簿ヲ授受致候儀相顯レ規則ノ通り過料金差出シ候後ニ其ツ至テモ其證書帳簿ハ取揚ケ裁判不相成候事

第拾二條 前條ニ掲クル證書ヲ以テ公裁テ仰カント欲スル節ハ受取主ニ於テ相當ノ印紙ヲ貼用シ調印濟ノ上ハ取揚ケ裁判可致事

第拾三條 第拾一條ニ掲クル證書ノ内界紙可相用處他紙ヲ相用候証書ヲ以テ公裁テ仰カント欲スル節ハ受取主ニ於テ其證書一錢印紙ヲ貼用シ調印濟ノ上ハ取上ケ裁判可致事

第拾四條 第拾一條ニ掲クル帳簿ヲ以テ公裁テ仰カント欲スル節ハ帳簿主ニ於テ相當印紙ヲ貼用シ調印濟ノ上ハ取揚ケ裁判可致事

第拾五條 甲乙等ノ號ヲ各帳ヘ記付シ同金高ヲ記載シ彼我ニ各

一帳ツ、所持シテ相互ニ交換致ス通帳ノ類二冊トモ後証トナルヘキモノハ甲乙共印紙貼用致スヘキ事

第拾六條 旅行先ニテ相用候帳簿ハ其管轄地ニテ官員巡廻ノ節調査テ受候トモ又ハ出先ニテ官員巡廻ノ節調査テ受候共便宜ニ任スヘキ事

第拾七條 最初帳簿附込見積金高百圓以内ト見込印紙貼用セヌ官員ノ調査ヲ受ケサルモノ漸々附込相嵩ニ誤テ百圓以上ニ及ヒ候者ハ附込金高二百圓以内ニテ他ヨリ發覺セサル以前ニ印紙貼用調印ノ上其管轄廳ヘ差出調査ヲ受候ニ於テハ犯則ノ限ニ無之事

第拾八條 印紙多數用フル節證書面狹隘ニテ貼用シ難キ分ハ証書裏面ヘ貼用致シ其二號圖ノ通り調印致スヘキ事

△明治七年第百三拾七號布告ヲ以テ左ノ一ケ條ヲ追補ス



一委任狀ノ儀ハ總テ界紙ヲ用フヘキ事

証書渡主ノ實印

証書渡主ノ實印

第一號圖

証

一金何何圓何拾錢  
 一金何拾圓

實印

〆金何拾何圓何拾錢  
 右ノ通、、、、、、、

年號月日 何ノ誰印

---

証

實

〇 印紙 〇 同

一金何百何拾圓

右者、、、、、、、

年號月日 何ノ誰印

何ノ誰殿

第二號圖

証書渡主ノ實印

同	同	同	印紙
同	同	同	同
	同	同	同
	同	同	同

第三號圖

帳簿主ノ印

實印

印紙 同

此帳簿附込見積金何千圓

年號月日

證券印稅規則



帳簿主ノ實印

實印

印紙

同

此帳附込何ヶ年限

年號月日

式書號四第

七百八十〇

式書號五第

第一類ハ

合附込金何千何百圓也

第三類ハ

何年何月ヨリ

滿何ヶ年附込濟

右之通聊相違無御座候以

上

年號月日 何ノ誰印

▲明治七年大藏省第八拾號達

証券印稅規則公布相成候ニ付テハ管下人民ヘモ左之通可相達事

一証券印紙貼用セル諸帳簿ハ其表紙ノ端ヘ(印稅濟)又附込見積

金高百圓未滿ニテ印紙貼用ニ及ハサル諸帳簿ニハ前同様(無

稅帳)ト顯然有稅無稅ノ分別ヲ朱ニテ相記シ取引先ノ便ニ供

候様可致事

但証券印紙貼用アルヘキ諸帳簿ヘ萬一印紙貼用無之儘ニテ

授受致シ候節ハ帳簿主ノミナラス取引ノ調印致シ候者ト雖

モ証券印稅規則中賞罰例第拾一條ノ通りニ候條各自精々注

意可致事

▲明治八年大藏省甲第八號布達

人民財産ノ受授並交際上相用候諸帳簿ノ儀ハ証券印稅規則ノ通

其類ニ應シタル印紙ヲ一帳毎ニ類別ヲ以テ貼用可致等ニ候ヘテ

証券印稅規則

七百八十一



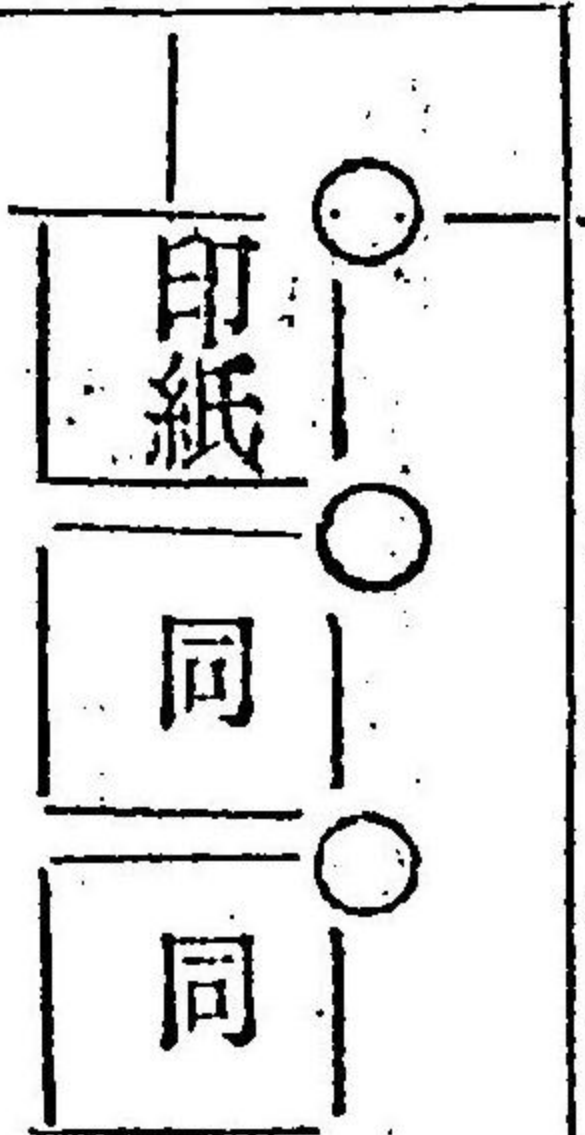
若シ一帳中へ第一類第二類ヲ取交セ付込度モノハ其合計見積金  
高ニ應シタル第二類印紙ヲ別紙圖式ノ通貼用致置候上ハ一帳簿  
へ雜記候トモ不苦候條此旨布達候事

但第三類帳簿ニ第一類第二類ヲ雜記致度節ハ第三類ノ印紙  
貼用ノ外本文ニ準シ第二類ノ印紙ヲ並貼用可致候尤モ一類  
而已ヲ雜記致ス節ハ第一類ノ印紙ヲ並貼用可致事

別紙

第一類帳簿ニシテ第二類ヲ雜記シ或ハ第二類帳簿ニシテ第一類  
ヲ雜記スルモノ書式左ノ如シ

都テ第二類印紙ヲ貼用ス  
帳簿主ノ實印



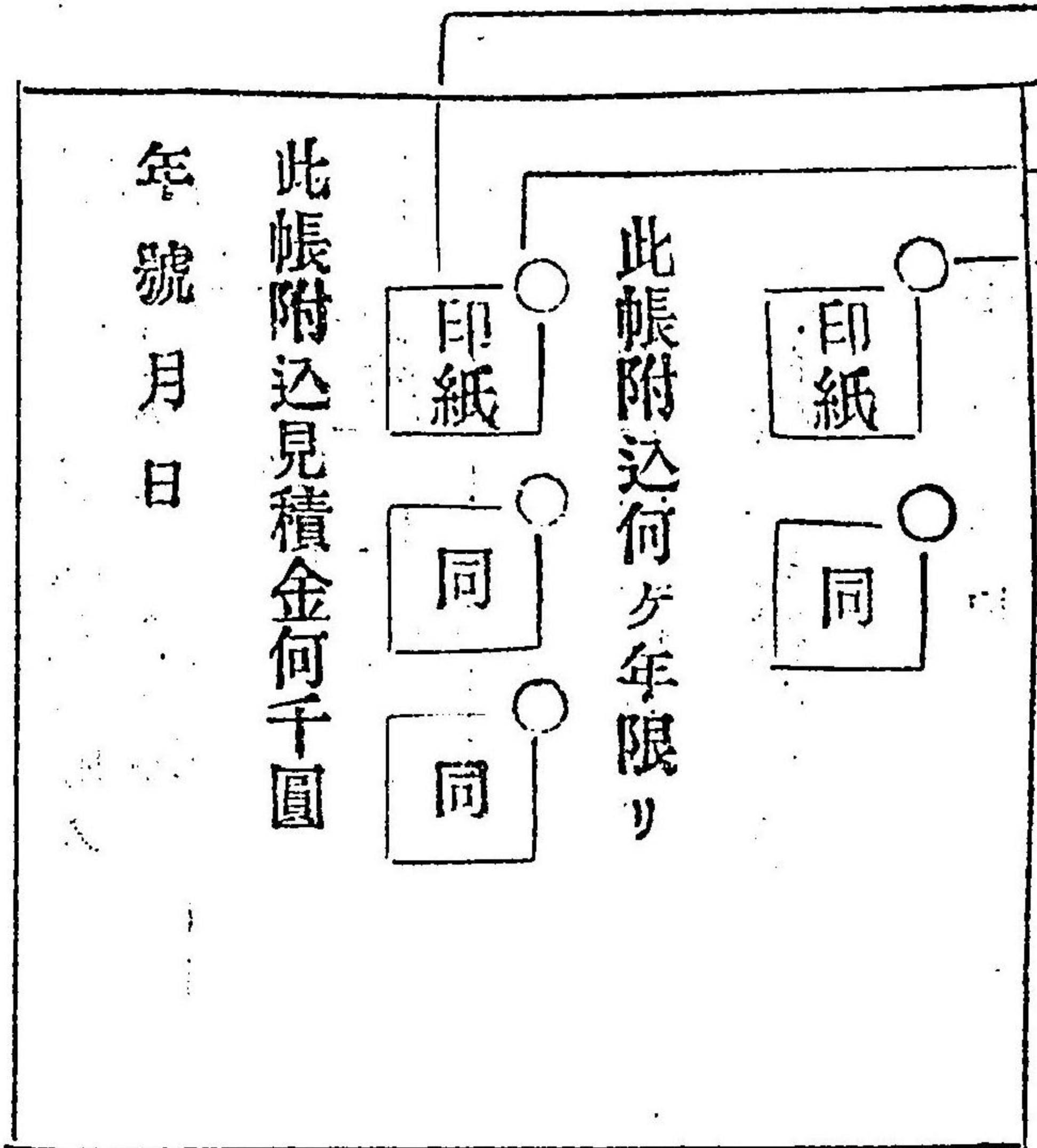
第一類第二類合計

此帳附込見積金何千圓

年 號 月 日

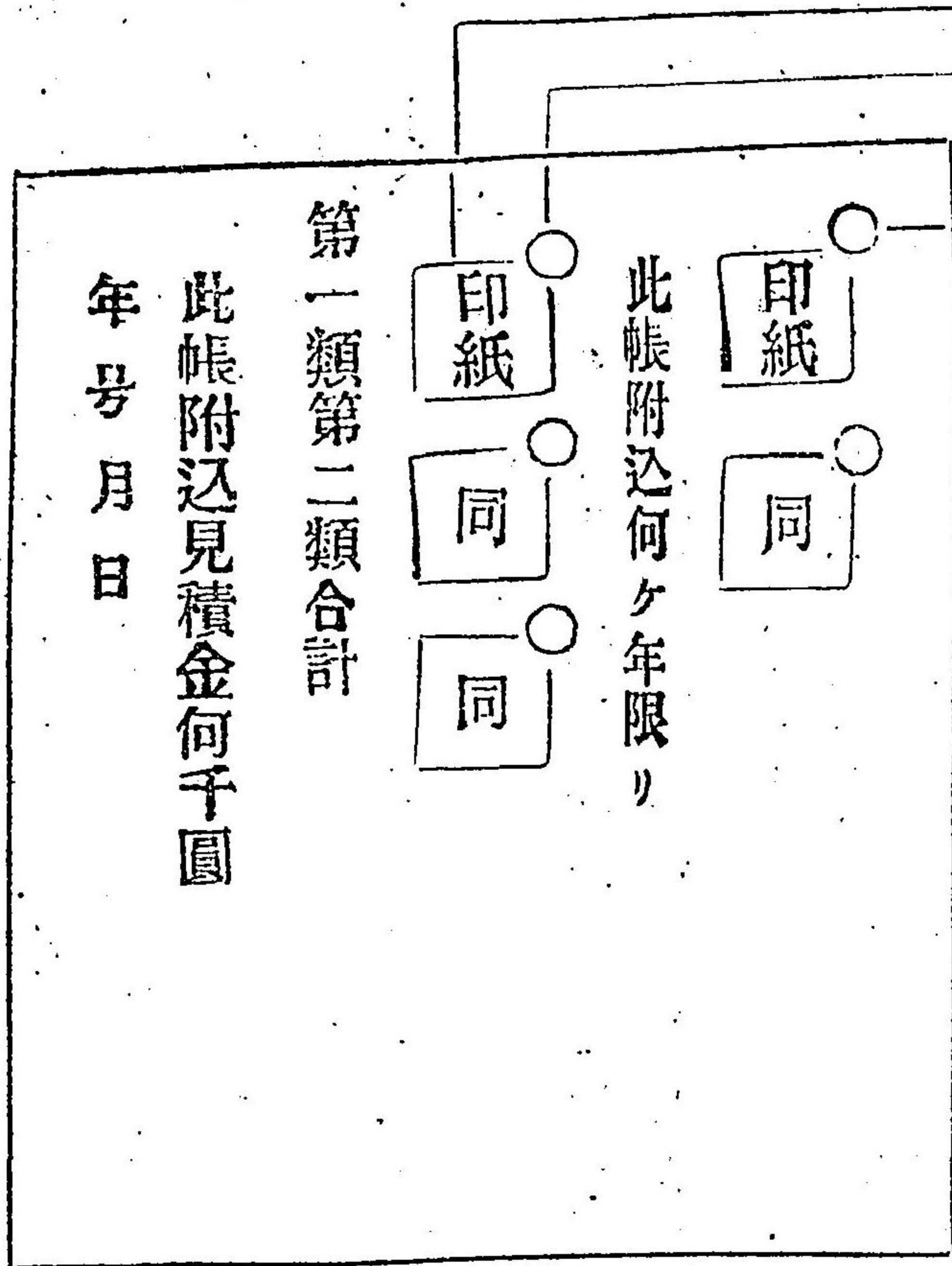


第三類帳簿ニシテ第一類又ハ第二類ヲ雜記スルモノ書式左ノ如シ  
第一類又ハ第二類印紙ヲ貼用ス  
帳簿主ノ實印



第三類帳簿ニシテ第一類第二類ヲ雜記スルモノ書式左ノ如シ

都テ第二類印紙ヲ貼用ス  
帳簿主ノ實印





▲明治六年十月大藏省第四百拾二號達

海陸運輸渡世ノ者証券印紙貼用方心得書

- 一 海陸運輸ノ諸荷物並貨幣等金拾圓以上ノ物ハ荷主へ可相渡請取證書へ金高ニ拘ハラヌ壹錢印紙貼用可致事
- 一 前同斷ノ貨物ニ付金高拾圓以上ノ運搬料請取候節ハ其請取證書へモ前同斷貼用可致候事
- 一 運輸スへキ物貨ト其運搬料トノ請取證書ヲ荷主都合ニ寄リ別通ニセスシテ一紙証書ヲ要スルハ請取書面總金高ニテ拾圓内外ノ區別ヲ分ケ兩種ヲ兼壹錢印紙貼用不苦候事  
但諸物貨及ヒ其運搬料共金高拾圓以下ノ節ハ双方請取書へ印紙貼用不及候へモ一通證書ニ致シ候節總金高拾圓以上ニ及ヒ候ハ、本文ノ通印紙貼用可致候事
- 一 假令ハ東京ヨリ各所問屋ノ手ヲ經長崎或ハ青森等ニ達スル物

貨(金高拾圓以上ノ者)ハ請繼數回ニ候へモ最前甲問屋ヨリ前書箇條ニ照シ印紙アル請取書類ヲ荷主へ相渡シ運輸ノ物貨ニ印紙アル元送狀附着有之候上ハ乙丙丁問屋等ニ於テ授受之証書ハ勿論添送狀等ニ至ル迄渾テ印紙貼用不及候へモ長崎青森ノ如キ結尾ノ場所へ其荷物着ノ上ハ荷請主ヨリ取置候受取証書ハ印紙貼用爲致候事



第五拾三章 府縣會規則

○明治十三年四月八日第拾五號布告

第一章 總則

第一條 府縣會ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徵收方法ヲ議定ス

第二條 府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ分ツ其定期ニ於テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條 通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ總テ府知事縣令ヨリ之ヲ發ス

第四條 臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スルヲ得ス

第五條 府縣會ノ決議ハ府知事縣令認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス若シ府知事縣令其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルキハ

其事由ヲ内務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

▲明治十四年二月十四日第四號布告ヲ以左ノ一項ヲ追加ス  
前項ノ場合ニ於テ府知事縣令ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得再議ノ後猶其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルキハ内務卿ノ指揮ヲ請フ前項ニ同シ

第六條 府縣會ハ毎年通常會議ノ初メニ於テ地方稅ニ係ル前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ受ケ府知事縣令ニ説明ヲ求ムルヲ得若シ異見アルキハ議長ノ名ヲ以テ直チニ内務大藏兩卿ニ上伸スルヲ得

▲明治十五年十二月二十八日第六拾八號布告ヲ以テ本條ニ左ノ項追加出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ説明ヲ求ムルトキハ府知事縣令若シハ其代理人之ヲ説明スヘシ

第七條 (明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正



ス。通常會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ以テ其府縣内ノ利害ニ關スル事件ニ付キ建議ヲ爲サントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得テ之ヲ會議ニ付シ可決スルキハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ直チニ内務卿ニ建議シ又ハ府知事縣令ニ建議スルヲ得

但シ臨時會ニ於テハ其會議ヲ要シタル事件ニ限り建議スルヲ得

第八條 府縣會ハ府知事縣令ヨリ其府縣内ニ施行スヘキ事件ニ付キ會議ノ意見ヲ問フコトアルトキハ之レヲ議ス

第九條 府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事縣令ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルヲ得

府縣會ハ議員ノ内招集ニ應セズ又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサル者ヲ審査シ其退職者タルヲ決スルヲ得

▲明治十四年二月十四日第四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス

府知事縣令ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フコトアルキハ双方ヨリ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事縣令ハ其議事若クハ會議ヲ中止スルヲ得

### 第二章 選舉

第十條 府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ撰フ

▲明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ左ノ通り追加ス

每郡區議員定數ノ外補缺員トシテ十人以下ヲ増選スルヲ得

第十條 議長副議長ハ議員中ヨリ公選シ之ヲ府知事縣令ニ報告シ府知事縣令ハ之ヲ内務卿ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ニ俸給ナシ但シ會期中滞在日當及ヒ往復



旅費ヲ給ス其額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第拾二條 書記ハ議長之ヲ選ヒ庶務ヲ整理セシム其俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ支給ス

第拾三條 府縣會ノ議員タルヲ得ヘキ者ハ滿二十五歳以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但シ左ノ各款ニ觸ル、者ハ議員タルヲ得ス

第一款 風癩白痴ノ者

第二款 (明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス) 舊法ニ依リ一年以上懲役及ヒ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者  
新法ニ依リ公權ヲ剝奪及ヒ停止セラレタル者又ハ一年以上重禁錮ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款 (明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス) 官吏教導職及ヒ陸軍海軍諸卒現役ノ者

第五款 府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者

第拾四條 議員ヲ撰擧スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歳以上ノ男子ニシテ其郡区内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ルヘシ

但 (明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ但書左ノ通り改正ス) 但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ル、者及ヒ陸海軍々人現役ノ者ハ撰擧人タルヲ得ス

第拾五條 議員ヲ撰擧セントスルキハ府知事縣令ヨリ某月間ニ撰擧會ヲ開クヘキ旨ヲ布令シ郡區長ハ豫メ撰擧ノ投票ヲ爲ス



ハキ日ヲ定メ少クモ十五日前ニ之ヲ郡區内ニ公告スヘシ

第拾六條 撰舉ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡區長之ヲ調査シ撰舉會中ノ取締ヲ爲スヘシ但シ便宜ニ因リ郡區廳外ニ撰舉會ヲ開クコトヲ得

第拾七條 撰舉人ハ豫メ郡區長ヨリ付與シタル投票用紙ニ自己及ヒ被撰舉人ノ住所姓名ヲ記シ豫定ノ日之ヲ郡區長ニ出スヘシ其投票多數ヲ得タル者ヲ以テ當撰人トシ同數ナラハ年長ヲ取リ同年ナラハ鬪ヲ以テ之ヲ定ム

但シ投票ハ代人ニ托シ差出スモ妨ケナシ  
第拾八條 投票終ルノ後郡區長ハ撰舉人名簿ニ就テ投票ノ當否ヲ查シ又被撰舉人名簿ニ就テ當撰人ノ當否ヲ查ス若シ法ニ於テ不適當ナル者アルカ或ハ當撰人自ラ其撰ヲ辭スルキハ順次投票ノ多數ヲ得タル者ヲ取ル

第拾九條 當撰人ノ當否ヲ査定スルノ后郡區長ハ其當撰人ヲ郡區廳ニ呼出シ當撰狀ヲ渡シ當撰人ハ請書ヲ出スヘシ

但シ當撰人各請書ヲ出シタル后郡區長ハ其姓名等ヲ郡區内ニ公告スヘシ

第二拾條 一人ニシテ數郡區ノ撰ニ當ルキハ其何レノ郡區ニ屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二拾一條 議員ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選ス  
第一回二年期ノ改撰ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム  
第二拾二條 議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改撰毎ニ之ヲ公撰スヘシ

第二拾三條 前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再撰スルコトヲ得  
第二拾四條 (明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ本條中轉住ノ字ヲ轉籍ノ字ニ改メ而シテ但書ヲ追加ス乃チ左ノ如シ)



議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ  
轉籍スルカ其他總テ欠員アルキハ更ニ之ニ代ル者ヲ撰擧ス  
但シ補缺員アルキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取リ尙缺員  
アルキハ本條末文ノ手續ニ據ル

第三章 議則

第二拾五條 議員半數以上出席セサレハ當日ハ會議ヲ開クヲ  
得ス

第二拾六條 會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルキハ議長ノ  
可否スル所ニ依ル

第二拾七條 府知事縣令若クハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨  
趣ヲ辨明スルヲ得

但決議ノ數ニ入ルコトヲ得ス

第二拾八條 會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事縣令ノ要メニ依リ又ハ

議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二拾九條 議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レモ人身  
上ニ付テ褒貶毀譽ニ涉ルコトヲ得ス

第三拾條 議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議  
長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルキハ議長ハ之ヲ議場外  
ニ退去セシムルヲ得其強暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ム  
ルヲ得

第四章 開閉

▲明治十五年十二月二十八日第六拾八號布告ヲ以テ第三拾一條  
第三拾二條左ノ如ク改正ス

第三拾一條 府縣會ハ毎年一度三月ニ於テ之ヲ開ク其開閉ハ府  
知事縣令ヨリ之ヲ命ス會期ハ三十日以内トス但區郡會ヲ開ク  
地方ニ於テハ七日以内延期スルコトヲ得



第三拾二條 通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルハ府知事縣令ハ臨時會ヲ開クコトヲ得其會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直ニ內務卿ニ報告スヘシ

第三拾三條 會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルハ府知事縣令ハ會議ヲ中止セシメ內務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

▲明治十五年十二月廿八日第六拾八號布告ヲ以テ本條へ左ノ二項ヲ追加ス

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會議内ニ於テ議案ヲ議決シ終ラサルトキハ府知事縣令ハ更ニ其議定ヲ要セス內務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得第一項ノ場合ニ於テ內務卿ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スル迄ノ間ハ府知事縣令ニ於テ地方稅ノ經費豫

算及徵收方法ヲ定メ內務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得議員招集ニ應セサル者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルコトアルハ府知事縣令ハ其事由ヲ內務卿ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ

第三拾四條 (明治十四年二月二十四日第四號布告ヲ以テ本條中「閉會ヲ命シ又ハ」ノ七字ヲ除削シ而シテ第二項ヲ追加ス乃チ左ノ如シ)

會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルハ內務卿ハ何レノキヲ問ハス議員ノ解散ヲ命スルコトヲ得前項ノ場合ニ於テ前議員ノ未ダ議定セサル議案アルハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシムヘシ

第三拾五條 內務卿ヨリ解散ヲ命シタルハ其解散ヲ命シタル日ヨリ九拾日以内ニ更ニ議員ヲ改撰スヘシ

▲明治十三年十一月五日第四拾九號布告



本年(本月)第四十八號ノ布告アルニ依リ本年(四月)第拾五號  
布告府縣會規則へ左ノ通追加ス此旨布告候事

第五章 常置委員

第三拾六條 府縣會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ  
選任スヘシ

▲明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ本條へ左ノ通り追加  
ス

常置委員定數ノ外數名ヲ增撰シ缺員アルキハ順次投票ノ多數  
ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得

區部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ區郡各部ニ之ヲ選任  
スヘシ

▲明治十五年十二月二十八日第六十八號布告ヲ以テ左ノ如ク改  
正ス

第三拾七條 常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ  
方法順序及豫備ノ支出ニ付府知事縣令ヨリ諮問アルトキ其意  
見ヲ述フ

常置委員ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急施ヲ要  
スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徵收方法ヲ議決シ追テ府縣  
會ニ報告スルヲ得

第三拾八條 常置委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會議ニ於テ議  
決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且ツ通常會ト臨時會トヲ論ゼス  
府知事縣令ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ請取リ會議ニ向テ其意  
見ヲ報告スヘシ

第三拾九條 常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘ  
シ

第四拾條(明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ本條中常置



委員ノ下「諮問」ノ二字ヲ增加ス

常置委員ノ諮問會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セス

第四拾一條（明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス）

諮問會ハ府知事縣令ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ撰擧スヘシ

第四拾二條 常置委員ハ半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四拾三條 常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ筆記セシムヘシ

第四拾四條 府知事縣令ハ主務ノ僚屬ヲ委員會議ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辨明ヲ爲サシムルヲ得

第四拾五條 常置委員會議ハ傍聽ヲ許サス

第四拾六條（明治十五年二月十四日第拾號布告ヲ以テ本條中二ヶ年トシノ下「議員ノ改撰毎ニ之ヲ改撰ス但」ノ十三字ヲ增加ス

常置委員ノ任期ハ二ヶ年トシ議員ノ改撰毎ニ之ヲ改撰ス但期限ニ至リ再撰スルヲ得

第四拾七條（明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ議長ヲ府知事縣令ノ五字ニ改ム）

常置委員會所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事縣令之ノ撰任ス

第四拾八條 常置委員ハ三拾圓以上八拾圓以下ノ月手當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ府縣會ノ議決ヲ以テ定ム

第四拾九條 常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方稅ヨリ支給ス



▲明治十三年九月廿八日太政官達

府縣會規則ノ儀ニ付左ノ二件爲心得相達候事

一議員撰擧ノ際郡區相當人員ノ外辭撰者補欠ノ爲メ別ニ數名（五名以下）ヲ副撰セシメ置クモ妨ケナシ

一議長副議長共欠席スルキハ議員中ニ於テ臨時假議長ヲ公撰シ其日ノ會議ヲ開クモ妨ケナシ

▲明治十五年十二月二十八日第七拾號布告

府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルコトヲ許サス

其集會スルモノ何等ノ名義ヲ以テスルモ知府事縣令ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムルトキハ直ニ解散ヲ命スヘシ

前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ集會條例第拾三條ニ依テ處分ス

▲明治十三年十二月二日內務省乙第四拾八號達

本年第四拾九號ヲ以テ府縣會規則追加公布相成候ニ付左ノ條件爲心得相達候事

一（此一項ハ同年乙第五拾三號達ヲ以テ取消シ更ニ左ノ通り改正ス）

一常置委員ハ來十四年通常會開會前ニ於テ撰任スヘシ

一十三年度中常置委員ノ月手當及往復旅費ハ委員ヲ撰擧セシムル臨時會ニ於テ議定セシムヘシ

一郡區經濟ヲ異ニスル府縣ニ在テハ定員内ニ於テ其郡區撰出ノ人員ヲ定ムルヲ得

一常置委員補欠ノ爲メ相當ノ豫備員ヲ撰ヒ置クモ妨ケナシ

一第四拾一條ニ據リ議長ハ府知事縣令之ヲ勤ムト雖モ本務ノ都合ニ依リ書記官之レカ代理ヲ爲スヲ得



一第四拾六條ノ通委員ノ任期ハ二年タルヘシト雖モ若シ議員ノ任期ヲ終ヘタルモノハ其本分ノ任期ト共ニ委員ノ任期モ終リタルモノトス

一常置委員會議ノ細別ハ該會ニ於テ議決シ府知事縣令認可ノ上施行スヘキモノトス

▲明治十四年二月十四日第六號布告

府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

▲明治十四年二月十四日第八號布告

東京府京都府大坂府神奈川縣區郡部會規則左ノ通相定メ明治十三年(五月)第二拾六號及ヒ第二拾七號布告廢止候條此旨布告候事

第一條 三府及ヒ神奈川縣ニ於テハ府縣會ヲ分テ區部會郡部會

トナシ區部郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシム

第二條 區部會郡部會ニ於テ議定スヘキ事件ト府縣會ニ於テ議定スヘキ事件トハ府縣會ニ於テ之ヲ議定ス

第三條 府縣會規則第拾條ノ定限外ニ於テ區部議員ノ増加ヲ要スルキハ府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ其定限ヲ殊ニスルヲ得

第四條 府縣會ハ區部郡部議員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第五條 府縣會ノ議定ニ屬スル事件ニ付テハ區部郡部常置委員會同シテ諮問ヲ受ケ又ハ議決スヘシ

但區部郡部常置委員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第六條 (明治十五年二月十四日第十二號布告ヲ以テ削除ス故ニ



略ス)

第七條 (同上故ニ零ス)

第八條 明治十三年度以前ニ係ル地方税ノ中區郡連帶支辨セルモノハ其決算ヲ府縣會ニ報告シ區郡ニ分別セルモノハ其決算ヲ各別ニ區部會郡部會ニ報告スヘシ

▲明治十五年二月十四日第拾二號布告ヲ以テ左ノ通り第九條ヲ追加ス

第九條 區部ニ係ル戸數割ハ區部會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ内務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ得テ家屋税ト爲スヲ得

第五十四章

府縣農商工諮問會規則

○明治十四年五月二十三日第二十九號布告

各地農商工ノ實況ヲ視察シテ勸業ノ事務ヲ着實ナラシメ倍々其改進ヲ圖ランカ爲メ今般農商工諮問會規則左ノ通制定候條此旨布告候事

第一條 各府縣ニ農商工諮問會ヲ開ク

第二條 農商工諮問會ハ凡ソ農商工ニ關スル事件就中海陸ノ運漕道路ノ開鑿港灣ノ修築川渠並ニ用惡水路ノ疏通惡蟲ノ驅除法獸畜類傳染病ノ豫防法山林ノ保蓄栽培伐採各地方ニ適應スヘキ動植物及ヒ器具ノ試驗勸業列品場其他農商工摸範建造物設置ノ方法市場ノ興廢並ニ其規則按ニ就キ農商務卿若クハ府知事縣令ヨリ諮問スル事件ヲ審議シテ其意見ヲ具申シ併セテ農商工ノ盛衰其他ノ統計ヲ調査スルノ任アルモノトス

府縣農商工諮問會規則



第三條 會員ハ府知事縣令其府縣内ニ滿三年以上住居本籍寄留  
ヲ問ハスニシテ二十五歳以上ノ男子ニシテ名望アル農商工五名  
以上十五名以下ヲ撰ンテ之レニ任ス其任期ハ三ケ年トス但シ  
滿期再選スルヲ得

第四條 議長ハ府知事縣令若クハ其代理人之ヲ勤ムヘシ

第五條 書記ハ府知事縣令其属官中ニ於テ之ヲ命ス

第六條 會議ハ每年少クモ一回開クヘキモノトシ若シ會員ノ三  
分一以上ノ請求アルトキハ府知事縣令ニ於テ臨時之ヲ許可ス  
ルヲ得

第七條 農商務省ノ官吏農商工上等會員及農商工諮問會所在府  
縣ノ官吏ハ會議ニ列シテ意見ヲ述フルヲ得但決議ノ數ニ入ラ  
ス

第八條 會議ハ多數ニ決ス可否半ハスルモハ議長ノ可否スル所

ニ依ル

第九條 會員ハ旅費日當ヲ給ス其額ハ該府縣會議員ト同一ナル  
ヘシ

第十條 會費中會員ノ旅費日當地方稅中勸業費ヲ以テ支辨シ其  
他ノ雜費ハ府縣廳費ヲ以テ支辨スヘシ

第二章 區及ヒ聯合區町村農商工業議會

第十一條 各府縣ノ區又ハ聯合區町村ニ於テ農業議會若クハ商  
業議會若クハ工業議會ヲ設立シ或ハ農商工業ノ爲メ一ノ議會  
ヲ設立スルヲ得

第十二條 各議會ハ其農商工業ノ利害ヲ議究シ及ヒ府知事縣令  
若クハ農商務卿ヨリ諮詢スル事件ヲ審議シ其意見ヲ開申スヘ  
キモノトス

第十三條 各議會ハ其農商工業ノ利害ニ關スル事件ニ付キ府知



事縣令及ヒ農商務卿ニ建議スルヲ得

第拾四條 議會ヲ設立セントスルキハ其區會又ハ聯合區會村會ノ認可ヲ得府知事縣令ヲ經由シテ其願書ヲ農商務卿ニ捧ケ其許可ヲ請フヘシ

第拾五條 農工業各議會ノ議員ハ滿二十五歳以下ノ男子ニシテ其議員區域内ニ住居(本籍寄留ヲ問ハス)スル製産者及ヒ該地ノ製産物ヲ賣買スル商人中ヨリ公選シ商業議會ノ會員ハ同上ノ要件ニ適應シタル商人中ヨリ公選シ府知事縣令ノ認可ヲ請フヘキモノトス但シ府縣會規則第拾三條ノ各款ニ觸ル、者ハ議員タルヲ得ス

第拾六條 議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歳以上ノ男戸主ニシテ其議會區域内ニ住居(本籍寄留ヲ問ハス)シタル農商工業者ニ限ル但シ府縣會規則第拾三條ノ各款ニ觸ル、者ハ選舉

ハタルコトヲ得ス

第拾七條 農工業各議會ノ議員ハ二十五人以下トシ商業議會ノ議員ハ五十人以下トシ議員中投票ヲ以テ議長一人副議長一人ヲ選舉スヘシ議員ノ任期ハ三ケ年トス但シ滿期再選スルヲ得

第拾八條 議會ノ費用ハ議員撰舉人ノ協議若シハ其議會區域内ノ協議費ヲ以テ支辨スヘシ

第拾九條 各議會ノ細則ハ其議ニ於テ之ヲ創定シ府知事縣令ヲ經由シテ農商務卿ノ認可ヲ請フヘシ



第五拾五章 地方稅規則

○明治十三年四月八日第拾六號布告

明治十一年(七月)第拾九號布告地方稅規則左ノ通改正候條此旨

布告候事

第一條 地方稅ハ左ノ目ニ從ヒ徵收ス

一 限租三分一以內(本ト五分一以內トアリシヲ明治十三年第

一 營業稅並雜種稅四拾八號布告ヲ以テ三分一以內ニ改ム)

一 戶數割

第二條 營業稅雜種稅ノ種類及ヒ制限ハ別段ノ布告ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 費用左ノ如シ(明治十三年十一月五日第四十八號布告

ヲ以テ本條中增加廢止及ヒ明治十四年二月十四日第五號布告

ヲ以テ追加改正ス乃チ左ノ如シ

一 警察費

一 土木費 府縣ニ屬スル河港道路堤防橋梁建築修繕等ノ費用及ヒ區町村ニ屬スル全上ノ補助費

一 府縣會議費

一 衛生及ヒ病院費

一 教育費 府縣ニ屬スル教育ノ費用及ヒ區町村立學校ノ補助費

一 郡區廳舍建築修繕費

一 郡區吏員給料旅費及ヒ廳中諸費

一 救育費

一 浦役場及難破船諸費

一 管内限リ諸達書及ヒ揭示諸費

一 勸業費

一 戶長以下給料及ヒ戶長職務取扱諸費 爲替方給料爲換手數

一 地方稅取扱費 料現金遞送等ノ費用

地方稅規則



以上費目互ニ流用スルヲ許サス

▲明治十五年十二月二十八日第六十九號布達ヲ以テ左ノ如ク改正ス

- 一 豫備費 豫算外ニ生シタル事件ノ費途及豫算ノ臨時不足ニ充ツル者
- 一 府縣廳舎建築修繕費
- 一 府縣監獄費
- 一 府縣監獄建築修繕費

各町村限及ヒ區限ノ入費ハ其區内人民ノ協議ニ任セ地方稅ヲ以テ文辨スルノ限ニアラス

第四條 其年七月ヨリ翌年六月迄ヲ一週年度トナシ府知事縣令ハ其年二月迄ニ地方稅ヲ以支辨スヘキ經費ノ豫算並地方稅徵收ノ豫算ヲ立テ翌年度ノ定額トナシ其府縣會ノ議決ヲ取リ其年五月ヲ以內務卿及ヒ大藏卿ニ報告スヘシ

▲明治十五年十二月二十八日第六十九號布告ヲ以テ第四條第五條左ノ如ク追加改正ス

地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事件數年々期ノ施行スルモノハ初年ニ於テ其年期間各年度ノ經費豫算ヲ定メ府縣會ノ議決ヲ取リ府知事縣令ヨリ內務卿ニ具狀シ認可ヲ得テ其年期間之ヲ施行スルヲ得

第五條 非常ノ費用ハ（豫算ニ立ツルヲ得サル天災時變ノ費用豫算費ヲ以テ給足セサルモノヲ云フ）別ニ賦課スルヲ得ルト雖モ其府縣會ノ議決ヲ取リ內務卿及ヒ大藏卿ニ報告スヘシ（其急施ヲ要スル云々以下ハ明治十四年二月十四日第五號布告ヲ以テ削除ス）

前年度經費決算ノ場合ニ已ムヲ得サル事故アリテ費目中不足ヲ生スルモノアルハ府知事縣令ハ府縣會ノ議決ヲ取リ其補



充費ヲ徵収スルヲ得

第六條 地方稅徵収ノ期限ハ府知事縣令適宜之ヲ定ムヘシ

第七條 (明治十四年二月十四日第五號布告ヲ以テ左ノ通り改正

(六) 府知事縣令ハ一週年度間ノ出納ヲ計查シ精算帳及ヒ計表

ヲ製シ翌年通常會議ノ初メニ於テ之ヲ府縣會ニ報告シ然ル後

內務卿及ヒ大藏卿ニ報告スヘシ

第八條 (明治十四年二月十四日第五號布告ヲ以テ刪除ス故ニ畧

ス)

第九條 島嶼ノ地方稅ニ係ル經費ハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事

縣令ヨリ內務卿ニ具狀シ其裁定ヲ得テ本屬府縣ノ經費ト之レ

ヲ分別スルヲ得

▲明治十三年十一月五日第四拾八號布告中第三條左ノ如シ

第三條 府縣土木(即河港道路堤防橋梁建築修繕)費中官下渡金

ハ來ル十四年度ヨリ廢止ス

▲明治十三年四月八日第拾七號布告

明治十一年(十二月第三拾九號地方稅中營業稅雜種稅ノ種類及

ヒ制限左ノ通改正候條此旨布告候事

第一條 營業稅目左ノ如シ其制限金拾五圓以內トス但國稅アル

ヲ除ク

會社

卸賣商

仲買商

小賣商

雜商

第二條 雜種稅ハ其種類ニ依リ各個ニ稅額ヲ定ム其目左ノ如シ

製造所職工一ヶ年金拾五圓以內 (圈點ヲ施ス二字ハ明治十

四年二月十四日第九號布



告ヲ以テ  
追加ス

船（明治七年第二拾一號布告靜漁船云々ノ分）車（馬車  
人力車 荷積馬車 荷積大七六八車 荷積中小車 荷積牛  
車ノ類）國稅ノ半額以內  
市場演劇場其他興行遊覽所 上リ高百分五以內  
遊技場（玉突 大弓揚弓 射的 吹矢ノ類） 壹ケ年金貳  
拾圓以內  
料理屋（西洋料理屋共） 待合茶屋 遊船宿 芝居茶屋 人  
寄席 壹ケ年金拾貳圓以內  
質屋 兩替屋（爲換店共） 陸運又ハ廻漕ヲ以テ業トスル者  
壹ケ年金拾五圓以內  
古着古金古道具類（書畫骨董店共）商 旅籠屋 諸飲食店  
（鰻屋 鮓屋 蕎麥屋ノ類）壹ケ年金拾圓以內

湯屋 理髮床 雇人請宿 壹ケ年金五圓以內  
遊藝師匠 遊藝稼人 相撲壹ケ年金拾貳圓以內  
俳優 壹ケ年金六拾圓以內  
辯問 藝妓 壹ケ年金四拾貳圓以內  
水車 壹ケ年金拾圓以內  
乘馬（自用渡世共） 壹ケ年壹頭ニ付金壹圓以內  
屠畜 壹頭ニ付金五拾錢以內  
第三條 漁業稅採鹽稅ハ各地從來ノ慣例ニ依リ之ヲ徵收スヘシ  
若シ其例規ヲ改正シ又ハ新法ヲ創設セントスルモノハ府縣會  
ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁  
可ヲ受クヘシ  
第四條 府知事縣令ハ府縣會ノ決議ヲ以テ第一條第二條類目  
ニ於テ賦課スル者ヲ取捨スルコトヲ得

地方稅規則



第五條 府知事縣令ハ其賦課スヘキ各業ノ盛衰ヲ視察シ府縣會  
 ノ決議ヲ以テ稅額制限内ニ於テ各個ノ稅額ヲ査定スヘシ

第六條 凡ソ稅額ハ一ケ年ヲ以テ其制限ヲ定ムト雖モ各地ノ便  
 宜ニ依リ年額ニ準據シ日稅月稅ニシテ之ヲ徵收スルコトヲ得

第七條 凡ソ上リ高ヲ以テ稅額ヲ定ムルモノハ各地ノ便宜ニ依  
 リ上リ高見積リテ以テ日稅月稅トシテ之ヲ徵收スルコトヲ得

第八條 第四條第五條ニ於テ確定シタル課額ハ府知事縣令ヨリ  
 內務大藏卿ニ報告スヘシ

第九條 第一條第二條第三條稅目ノ外地方特別ノ課稅ヲ要スル  
 モノハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ具  
 狀シ政府ノ裁可ヲ受クヘシ

第五拾六章 請願規則

○明治十五年十二月十二日第五十八號

第一條 人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願セシトスル  
 者ハ左ノ條規ニ依ルヘシ

第二條 郡區長及戶長職務内ノ事件ハ郡區長戶長ニ請願スヘシ  
 郡區長戶長ノ指令ニ服セサルモノハ府知事縣令ニ請願シ府知  
 事縣令ノ指令ニ服セサルモノハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令  
 ニ服セサルモノハ太政官ニ請願スルコトヲ得

府知事縣令警視總監職務内ノ事件ハ府知事縣令警視總監ニ請  
 願スヘシ府知事縣令警視總監ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿ニ  
 請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ  
 得

各省卿職務内ノ事件ハ其卿ニ請願スヘシ其指令ニ服セサル者



ハ太政官ニ請願スルコトヲ得

第三條 凡ソ請願スル者ハ書面ヲ以テスヘシ口陳スルコトヲ許

サ大官署ノ求ニ應ジテ開陳スルハ此限ニ在ラズ

第四條 請願書ハ請願人自ラ署名捺印シ族籍住所ヲ記シ戸長ニ

請願スル者ヲ除ク外住所戸長ノ奥印ヲ受クヘシ其連名ヲ以テ

請願スル者ハ各人自ラ署名捺印シ族籍住所ヲ記シ其總代又ハ

請願發起人アルトキハ其由ヲ肩書スヘシ戸長ノ奥印ヲ受ルハ

前ノ例ニ同シ

第五條 府縣郡區總代又ハ結社總代ノ名ヲ以テ請願スルコトヲ

得ス但成法ニ制定セラレタル會社ハ此限ニ在ラス

第六條 請願書ヲ上呈スルニハ代人ヲ以テスルコトヲ許サス數

人連名スル者ハ請願人中ニ於テ三名以下ノ總代人ヲ撰ヒ之ニ

委托スヘシ

第七條 請願書ハ郵便ヲ以テ上呈スルコトヲ得

第八條 上司ニ呈スル請願書ニハ其經歷スル所ノ官署ノ指令書

ヲ添フヘシ

第九條 請願書ノ郵達ヲ得タル各省若シ其主務ニ非サルトキハ

直ニ之ヲ主務省ニ移シ其由ヲ請願人ニ通知スヘシ

第十條 太政官ニ於テ請願ヲ裁可スルトキハ主務省ニ付シテ處

分セシムヘシ

第十一條 太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ更ニ請願スルコトヲ得ス

又裁判所ニ訴フルコトヲ得ス

第十二條 請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 凡ソ事ノ建白ニ属スヘキ者ハ人民各自ノ利害ニ係ル

ヲ以テ請願スト雖モ受理セス

第十四條 行政處分ノ既ニ五年ヲ經タル者ハ請願ヲ受理セス



第拾五條 請願人第二條ノ順序ヲ經テ及第三條第四條第五條第六條第八條第拾一條ノ規程ニ循ハサル者ハ受理セス

第拾六條 請願書ニ侮辱誹毀ノ語ヲ用ヒ及第二條ニ示ス所ノ官署ノ外ニ向ヒ請願スル者ハ受理セス

第拾七條 條規ニ違ヒ受理セラレサルノ請願ヲ以テ強テ受理ヲ請フ者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス其連名請願スル者ハ情ヲ知ラサル者ヲ除ク外各人均ク罪ヲ論ス其發起人ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス若シ請願人ノ外教唆者アルトキハ發起人ト同ク罪ヲ論ス其嘯聚ニ渉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第拾八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ渉ル者十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス  
其侮辱ニ渉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第拾九條 請願者ハ新聞紙其他ノ文書ヲ以テ公行スルコトヲ許サズ犯ス者ハ罪前條第一項ニ同シ

第二拾條 請願ニ由リ人ヲ誣告スル者ハ刑法ニ依テ處分ス



第五十七章 富籤賣買ノ牙保幫助ヲ爲シ及富籤ヲ購賣シタル者處分方

○明治十五年五月廿四日第貳拾五號布告

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤賣買ノ牙保幫助ヲ爲シ及ヒ富籤ヲ購賣シタル者處分方左ノ通制定ス

第一條 凡ソ富籤賣買ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條 凡ソ富籤ヲ購賣シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未タ拂ハサルトテ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借リテ購賣シタル者及ヒ他人ヨリ讓リ受ケル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ處テタル刑

期金額ノ二倍ニ處テ但シ初犯ニ科シタル刑罰金額ニ下ルコトヲ得ス

第四條 富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

再犯ニ係ル者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

第六條 富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項ニ依ル



第五十八章 傳染病豫防規則

○明治十三年七月九日第三十四號布告

總則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺、腸窒扶私、赤痢、實布、埃利亞、發疹、瘰癧私及痘瘡ノ六病ヲ云フ

但シ六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルキハ地方長官ハ內務省ニ具申シ豫防法ヲ施行スヘシ

第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ遲クモ二十四時間ニ之ヲ患者所在ノ町村衛生委員ニ通知スルヲ要ス衛生委員ハ速ニ之ヲ郡區長及ヒ最寄警察署ニ通知シ郡區長ハ速ニ之ヲ地方廳東京府下ハ府廳及ヒ警視本署ニ届出ツヘシ

但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直チニ警察署ニ届出警察署ヨリ衛生委員ニ通知スルモ妨ケナシ

▲明治十三年十二月十四日第五拾四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ増加ス地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及ヒ治癒死亡ノ數ヲ內務省ニ申報スヘシ

第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルキハ其性狀ヲ記シテ速カニ之ヲ內務省ニ申報シ且ツ其管内及ヒ隣接若シハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其地碇泊ノ軍艦等ニ報告スヘシ

但（明治十三年十二月十四日第五百四號布告ヲ以テ但書ヲ削除ス故ニ畧ス）

第四條（明治十三年十二月十四日第五拾四號布告ヲ以テ削除ス故ニ畧ス）

第五條 諸官廳、兵營、軍艦、監獄及ヒ官立ノ學校病院製作所等ニ於テ傳染病者アル并其主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從



ヒ豫防法ヲ施行スヘシ

第六條 虎列刺、赤痢、發疹室扶私、痘瘡ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ムルハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ設クルヲ得

但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フ可シ

第七條 醫師並ニ衛生委員ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス若クハ病毒ノ傳播ヲ防キ難シト認ムル者ハ避病院ニ入ラシム可シ

第八條 掛リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其病名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外他人ト交通ヲ絶タシムヘシ

但シ患者治癒死亡又ハ避病院ニ入リタル後チ相當ノ消毒法ヲ行ハサルノ間ハ仍ホ本條ヲ遵守セシムヘシ

▲明治十五年八月廿六日第四拾七號布告

明治十三年(七月)第三拾四號布告傳染病豫防規則第八條中病名票貼付ノ儀當分之ヲ施行セス

虎列刺病

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及ヒ汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ケ一定ノ場所ニ運輸シ燒棄若クハ埋却セシム可シ

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其埋骨ハ改葬スルモ妨ナシ

第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル臥具衣服器具及ヒ病室船室等ハ消毒法ヲ行フニアラサレハ再ヒ之ニ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス

第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉、河流水道及ヒ厠間芥溜下水溝渠等總テ病毒萌生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノ

傳染病豫防規則



法ヲ設クヘシ

第拾三條 虎列刺流行スルキハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所ノ船舶ヲ検査シ患者若クハ死者アルキハ此規則從ニフテ處分スヘシ

第拾四條 虎列刺流行ノ勢猛劇ナルキハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シテ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ撰ヒ檢疫委員ト爲シ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルコトヲ得

▲明治十五年九月一日第四拾八號ヲ以テ布告左ノ一項ヲ追加ス此場合ニ於テハ醫師タル者吐瀉ノ二症ヲ兼備スル病ヲ診斷スルキハ總テ檢疫委員ニ届出ツヘシ但シ本項施行ノ終始ハ地方廳ヨリ之ヲ管内ニ告示シ内務省ニ申報スヘシ

第拾五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群

集ヲ差止ルコトヲ得

▲明治十四年十月七日第五拾八號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部分ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハシ其他ノ部分ニ及ホサル様遮斷シ得ヘキモノト見認ムルキハ地方官ヨリ内務卿ニ稟議シ交通ヲ絶タシムルノ處分ヲ爲スコトヲ得

但要用ノ者ハ掛官吏検査ノ上交通ヲ許スコトヲ得

腸室扶私病

第拾六條 腸室扶病流行ノ際ハ第九條第拾一條及ヒ第拾二條ヲ適用スヘシ

赤痢病

第拾七條 赤痢病流行ノ際ハ第九條第拾一條及ヒ第拾貳條ヲ適用スヘシ



寶布埤里亞病

第拾八條 寶布埤里亞病流行ノ際ハ第拾壹條ヲ適用シ患者ノ痰唾及ヒ之ニ汚穢スル物ハ燒棄若クハ埋却セシムヘシ

發疹室扶私病

第拾九條 明治十三年十二月十四日第五拾四號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス）發疹室扶私者アルトキハ第拾條第拾壹條ヲ適用シ其流行ノ際ニハ第拾貳條第拾三條第拾四條及ヒ第拾五條ヲ適用スヘシ

第貳拾條 發疹室扶私病者若クハ其死屍ヲ載セタル車輿等ハ毎回消毒法ヲ行フニアラサレハ他用ニ供スヘカラス

痘瘡病

第貳拾一條（明治十五年九月一日第四拾八號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス）痘瘡病者アルキハ第拾條第拾壹條及ヒ第貳拾條ヲ

適用シ患者ニ未痘者ヲ接近セシムヘカラス其流行ノ際ニハ第拾貳條ヲ適用スヘシ

罰則

第貳拾二條 醫師衛生委員此ノ規則ニ違背シタルキハ五拾圓以內ノ罰金ニ處ス

第貳拾三條 官吏其管掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタルキハ百圓以內ノ罰金ニ處ス

第貳拾四條 人民此規則ニ違背シタルキハ壹圓五拾錢以內ノ料ニ處ス



第五拾九章 行旅死亡人取扱規則

○明治十五年九月三十日第四十九號布告

第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルキハ所在戸長ハ之ヲ最寄墓地へ假埋葬スヘシ

其死例變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ

第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルキ戸長ハ死亡ノ狀況并ニ埋葬其他死亡人ニ属スル費用ノ計算書ヲ本籍戸長へ通報スヘシ本籍戸長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルキハ三十日限差出サシメ埋葬地戸長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルトキ戸長ハ其相貌景狀附属シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場へ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日

ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 死亡人所持ノ金銀ハ埋葬其他死亡人ニ属スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但シ本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルコト能ハサルキハ直チニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルキハ之ヲ本籍へ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ケ年間戸長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方稅雜收入ニ組入ルヘシ

行旅死亡人取扱規則



第六十章 遺失物取扱規則

○明治九年四月十九日第五十六號布告

第一條 凡ソ遺失物ト稱スルハ自ラ其遺失スルヲ覺テス及ヒ其所在ノ明カナラサルモノヲ云フ故ニ若シ其物ヲ得ルニ臨ミ物主其場ニ就テ主タルヲ証明スルニ於テハ直チニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ論スルヲ得ス

第二條 凡ソ遺失ノ物ヲ得レハ五日內ニ其主ニ還シ其主分明ナラサレハ之レヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜示シ一年內其主ナキハ之ヲ得者ニ給ス

第三條 凡ソ遺失者ハ其遺失スル物品ノ模様員數並ニ遺失ノ日時場所等ヲ可成丈詳細ニ記載シ速カニ官ニ届出ヘシ

但シ得者ヨリ其返還ヲ得ルキモ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第四條 凡ソ遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖モ其費用ヲ

償ハシムルヲ得且ツ得者ニ報勞ノ爲メ其物價百分ノ五ヨリ少カラズ貳拾ヨリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ

若シ物主得者ト其價額ヲ争フキハ官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條 凡ソ遺失物ヲ得ルニ物品盜贓ニ係ルモノハ直チニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止ニ其費用ノミヲ償ハシム

第六條 官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得ルモノハ之ヲ官ニ送ルヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ販スヘシ若シ借地人其借地ヨリ掘得タルキハ之ヲ地主ト中分セシム

但シ盜贓ニ係ルモノハ此限ニ在ラス

第七條 凡ソ遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサルキハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置ニ榜示シテ處分スルヲ第貳條ノ如シ

遺失物取扱規則



第八條 凡ソ家畜ノ類他所ニ逸走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルヲ第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財産ヲ毀損スル時ハ律ニ照ラシ處分ス

第九條 凡ソ逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之レヲ官ニ送ルヘシ若シ八日內其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第十條 凡ソ遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルヲ私物ニ異ナルヲナシ

第十一條 凡ソ警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハス遺失物ヲ得レハ速カニ之ヲ官ニ送り全ク其主ニ還附シ其主ナケレハ之レヲ官ニ沒ス

第十二條 凡ソ一切應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セズ並ニ官ニ沒ス

第十三條 凡ソ公私債証書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スルヲ得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條 凡ソ遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得若シハ埋藏物ヲ掘得テ官私ニ全ク送還セズ或ハ物主ノ其主タルヲ証明スルニ冒認シテ返還セサル者ハ并ニ律ニ照ラシテ處分ス

▲明治十年九月廿七日內務省甲第二拾號布達

明治九年(四月)太政官第五拾六號ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋藏物掘得ル者處分ノ儀公布相成候處右物品ノ中チ古代ノ沿革ヲ徵スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省ヘ届出檢査ヲ可受其品ニヨリ相當代價ヲ以テ購求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高テ發掘人ヘ下付シ該物品ハ永ク博物館ヘ陳列可致候條此



旨布達候事

但シ物品ハ先ツ掘出地名及ヒ形狀等ヲ詳記シ及ヒ摸寫スルモ  
ノヲ郵送シ其見込ミアルモノニテ遞送方相ヒ達候後チ本文ノ  
通り可取計候事

第六十一章 監獄則

明治十四年九月九日第八十一號達

監獄則

監獄則目錄

第一編

第一章 汎則

第二章 監署ノ規程

監獄規則



第三章 監獄ノ構造

第二編

第一章 役法 附時限

第二章 工錢

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第三編

第一章 給與

第二章 疾病 附死亡

第三章 書信

第四章 接見

第五章 差入品

第四編

第一章 教誨

第二章 賞譽

第三章 徵罰

監獄則

第一編

第一章 汎則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場 裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノヨシテ未決者ヲ

一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉 未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場 懲治人ヲ懲治スルノ所トス

拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スル所トス

監獄則



- 五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス
- 六 集治監 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治スルノ所トス  
北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス
- 第二條 監獄ハ内務卿ノ管轄ニ属ス但陸海軍ノ管轄ニ属スルモノハ此限ニ在ラス
- 第三條 集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場ハ警視總監又ハ府知事東京府ヲ除ク縣令之ヲ管理ス
- 第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルコトヲ得ス
- 第五條 内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ

- 警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ  
裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ  
府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルコトヲ得
- 第六條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ
- 第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ苦情ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得
- 第二章 監署ノ規程
- 第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス
- 第九條 監獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閲シ其他囚徒ノ傲惰ヲ生シ脱越等ノ事ナガラシムルヲ要



ス

第拾條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監狀又ハ所刑宣告書等ノ文書ヲ查閱シテ之ヲ領シ其領收ノ証ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書ナクシテ引致セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法庭ニ引致ノ時モ同往セシムルヲ得ス

已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

第拾壹條 入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ攜帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第拾貳條 新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ樣本ニ照シ其要項ヲ詳録シ一小房内ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲治人ノ監舎ニ入ルトキモ亦同シ

第拾三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精驗シテ危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第拾四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々証印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際匿セシ貨物ハ沒收ス

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フトキハ之ヲ許ス

第拾五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ修身又ハ營業ニ必要ナルモノ、ミチ許スヘシ

第拾六條 已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ定ニ記載シタル者ヲ別異ス

一 十六歳未滿ノ者ト滿十六歳以上ノ者

監獄則



二 滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年  
齡ニシテ初犯ノ者

三 初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第拾七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名  
ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着  
シ其番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ白布ヲ以テ覆面シ當眼  
ノ所ニ小孔ヲ穿テ其犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スル  
ヲ得サラシム

第拾八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其  
尊屬親ヨリ願出ルトキハ第貳十條第壹項ノ例ニ照シテ處分ス  
ヘシ

矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齢ハ滿八歲以上滿二  
十歲以下ヲ限トス

第拾九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 刑法第七十九條第八十條第八十貳條ニ從ヒ懲治場ニ留置  
スル幼年ノ者及ヒ瘡癩者

二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

第貳拾條 前條第二欸ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ証票ヲ具ス  
ルニ非レハ入場ヲ許サス但シ在場ノ時間ハ六個月ヲ一期トシ  
二年ニ過ルヲ得ス

入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舎ニ帶往  
セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第貳拾一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

一 十六歲未滿ノ者ト十六歲以上ノ者

二 滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同  
上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者



第貳拾二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領置ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘシ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第貳拾三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄サシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第貳拾四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ褫奪シタルトキハ之ヲ刪除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第貳拾六條ノ例ニ依ルヘシ

第貳拾五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ內務卿ニ申報スヘシ

第貳拾六條 特赦ヲ受タル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ

第貳拾七條 假出獄ヲ許サレタル者ニハ其証票ヲ與ヘ警察遞傳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ

監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ攜帶セシメス其金員ヲ錄シ共ニ其地ノ警察官項ニ記載シタル官吏ニ送致スヘシ

第貳拾八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルコトヲ得

第貳拾九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰ヒ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六個月以上其用務



ヲ繼續セシムルヲ得ス  
傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若シハ凌辱スルノ所  
爲アルヲ許サス

第三拾條 刑期滿限ノ後賴ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監中  
ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第三拾一條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時  
ヲ過ヘカラス

第三拾二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ  
看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ貳分時ヲ過サレハ埋葬若クハ  
下付スルヲ得ス

第三拾三條 死刑者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典  
獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其

監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺  
骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服  
ハ此限ニ在ラス

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品  
ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但送費ハ親屬ノ自辨トス  
若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒收ス

第三拾四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ  
依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一個年ヲ經ルノ後ニ  
非レハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五拾七條ニ照シテ處分スヘシ  
第三拾五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄  
官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ  
水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ違ナキ



并ハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ臨クノ外一時解放スルヲ得

第三章 監獄ノ構造

第三拾六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス

留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ牆壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第三拾七條 未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ

甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交遞スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同クシ甲乙適用スルヲ要ス

第三拾八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシムヘシ

闇室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

密室闇室ハ一室一人ヲ限トス

第三拾九條 接見室ハ監倉ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四拾條 燈火ハ監房外ニ置キ障礙スルノ虞ナガラシムヘシ

第四拾一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第二編

第一章 役法 附時限

第四拾二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ毎



囚一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歲以上十六歲未滿ノ者滿六十歲以上ノ者及ヒ病後ノ疲勞若クハ身体ノ虛弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應ジ作業ノ科程ヲ寬恕ス若シ己ムヲ得ス外役ニ服セシムルトキハ鐵鎖ヲ用テ二四毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ時雨ヲ其面ヲ掩ハシム但外行ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム

外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサラシムルヲ要ス

第四拾三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四拾四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者

モ又一日免役ス

一月一日

一月二日

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

新嘗祭

十二月三十一日

第四拾五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚徒ヲ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授ルヲ要ス

第四拾六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル



未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

第四拾七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時

ニ過キサル時間休憩時間ヲ除農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

△時附

第四拾八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル已決囚ハ每朝日出ノ頃

ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以内

監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四拾九條 定役ニ服スル者ハ每朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房

ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約于一時間ヲ役ニ就カシ

メ午前一時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休

役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表

ニ之ヲ定ム但時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ命スルハ鈴若クハ柝ヲ以

テシ全監一齊ニ動止セシム

第五拾條 科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラズ罷役セシム午飯

ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ

若シ偷懶ニシテ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サズ

第二章 工役

第五拾一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ

工錢ヲ科定シ之ヲ十分シ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分

ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決監ニ在ル者並ニ第拾九條第一款

ニ記載シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三

分ヲ監署ニ収メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ日當ノ

科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢モ又同シ

第五拾二條 第十九條第二款ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬



親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ノ工錢ハ其全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルコト能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五拾三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五拾四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干ト定ムヘシ

第五拾五條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得

第五拾六條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ工錢アルトキハ第三十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ

第五拾七條 在監人若シ逃走シタルキハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒収ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬無レハ之ヲ沒収ス

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送

第五拾八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シテ内務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒刑流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス

第五拾九條 北海道ニ在ル集治監ハ每歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒刑流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六拾條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ナシ

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎



第六拾一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住ス  
ヘキ家ナキトキハ屋舎ヲ貸與スヘシ  
屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ割置スルノ便ヲ計畫スルヲ  
要ス

第六拾二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又  
ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方  
法ヲ取糺シ之ヲ許否スヘシ  
前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ  
戶長ニ通告スヘシ  
其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ  
典獄之ヲ許否スヘシ

第三編

第一章 給與

第六拾三條 已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六拾四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若  
シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨  
スル不能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六拾五條 已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色ト  
ス

第六拾六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ  
長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ  
第六拾七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服

一 單衣

一 袴

監獄則



- 一 綿入衣
- 一 襦袢
- 就役服
- 一 單短衣
- 一 袷短衣
- 一 綿入短衣
- 一 襦袢
- 一 股引
- 雜具
- 一 蒲團
- 一 蚊蠅
- 一 莞蔴
- 一 枕

一 帶 長三尺

一 禪 長三尺

一 手巾

一 蓑

一 笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澁濯補綴シテ其用ニ充ルヲ得

第六拾八條 在監人一人一日ノ食糧

一 下白米十分ノ四	七合	強キ力業ニ服スル者
一 挽割麥十分ノ六	五合	輕キ力業ニ服スル者
一 同	四合	工役ニ服セサル者及ヒ
一 同	三合	滿十歲以上ノ未決者
一 同		十歲未滿ノ幼者

監獄則



一菜

金壹錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヲ得

第六拾九條

工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ

其幾倍ヲ得ル者等ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物

ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物

ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七拾條

在監人日用ノ雜費 澣濯補綴又ハ炊用ノ薪炭 一人一

日金壹錢貳厘以下トス

第七拾一條 監房常置ノ器具

一貯水器并ニ飲器 木製

一唾壺

一便器 同 木製大小二種但監房ニ廁間ノ接續スルモノニハ此器ヲ用ヒス

一小箒

一洗手盆

草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟力ナルモノ 木製

第七拾二條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ一

次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七拾三條 已決囚及ヒ懲治人ノ髮ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚アル

者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラス

婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サス

第七拾四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒ

テ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一

シテ之ヲ晒洗スヘカラス

第二章 疾病 附死亡

第七拾五條 在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若シ

ハ病室ニ於テ醫療セシム



懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七拾六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七拾七條 傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ慎重ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診察書ヲ副ヘ各其所屬長官ニ報告スヘシ

△死亡

第七拾八條 在監人死亡スレハ典獄看守長醫師并瘞テ之ヲ驗屍スヘシ

未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七拾九條 死者ノ親屬若シハ故舊第三十三條ニ記載シタル時

限ヨリ二十四時以内ニ在テ遺骸ノ下付テ請フトキハ之ヲ許シ

其者ヲ簿冊ニ署名押印又ハ花押セシムヘシ

遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約子面三寸長三尺五寸トス

第三章 書信

第八拾條 已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六個月間ニ一次ト

シ一通ニ過ルコトヲ得ス但其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於テ法律ニ觸ルコトナシ且必用ト認メタルトキハ此限ニ在ラス

第八拾一條 未決者ニ係ル書信ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八拾二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル書信ハ一個月一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス



第八拾三條 在監人ノ發スル書信ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サズ

第八拾四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル書信ハ典獄之ヲ檢閱シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限リ之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セズ

第八拾五條 書信ヲ檢閱スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀シ嫌疑ノ文章アリヤ否ヲ詳查スヘシ

第八拾六條 在監人ヨリ發スル書信ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム  
親屬故舊若シハ辨護人ノ書信ハ監獄署ニ宛之ヲ差出サシムヘシ

第四章 接見

第八拾七條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄先ツ之ニ面接シテ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ已ムヲ得サルノ事狀アリテ形跡ノ疑フヘキヲナキトキハ之ヲ許シ看守長看守並蒞テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サズ  
面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八拾八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ス

第五章 差入品

第八拾九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服



臥具又飲食物 炊烹ヲ要セサルモノニシ 贈ラント請フトキハ之  
ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

第九拾條 已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九拾一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ

金錢衣服夜具等ノ寄贈ヲ受タルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシ

ムヘシ

第四編

第一章 教誨

第九拾二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷  
善ノ道ヲ講セシム

第九拾三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開  
クモノトス

第九拾四條 懲治人ニハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖書等

ノ科目中ニ就テ之ヲ教フヘキモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表  
スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏  
名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又ハ其尊屬親  
ニ示スコトアルヘシ

第九拾五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易  
カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十  
四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

- 一 在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一 平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ愼テ容止  
ヲ正フスヘシ 未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 每朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ



- 一 每朝常用ノ諸器具清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁圍厠等ヲ掃除スヘシ
- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外へ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ同往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起歩スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス
- 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス 未決監ニハ此款ヲ除ク

- 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス
- 一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ
- 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ
- 一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ
- 一 病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ
- 一 水火風震等ノ際解放ニ遇フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ
- 右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケカル者又ハ官吏

監獄則



ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分ス  
ヘキモノナリ

年月日

某監獄署

第二章 賞譽

第九拾六條 已決囚獄則チ謹守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ  
於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九拾七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣  
ノ左袖ノ肩臂間ニ方二寸曲尺ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九拾八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト  
爲ヌヲ得

第九拾九條 賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接見  
及ヒ通信スルヲ許ス

第一百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ

係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金貳拾五錢以  
下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ  
食物ヲ購求スヘシ但第九拾七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス  
第一百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ録シテ檢  
察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第一百二條 懲治人第一百條ニ適シタル勞動アルトキハ金貳拾五錢  
以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

第三章 懲罰

第一百三條 已決囚獄則チ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ  
處罰ス

- 一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス
- 二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セ  
シメ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス

監獄則



三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

四 闇室 闇室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

第四百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食闇室ハ七晝夜ヲ限トス

減食闇室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第四百五條 懲治人及ヒ十六歳未滿ノ已決囚獄則チ犯ストキハ其輕重ヲ量リ右ノ例ニ從テ處ス

一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム

二 減食 常食ノ半以內テ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス

第四百六條 獨愼ハ七晝夜以內減食ハ三日以內トス

第四百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第四百三條第四百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第四百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受ケルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ褫奪ス

第四百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下而脚又ハ一脚ニ鈇ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鈇ニ貫キ腰間ニ繚帶セシメ繚帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上二貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ



之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地ニテ轉ハスモノトス其外役ニ服ス  
 ルトキハ鐵丸ヲ綴キ二人聯袂ノ法ニ從フ  
 第百拾條 減食或ハ圍室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシ  
 テ診視モシメ身體ニ妨ナキトキテ証シテ後之ヲ行フヘシ  
 第百拾一條 屏禁減食圍室又ハ獨慎ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若  
 シハ看守長時々其動靜ヲ觀察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ教誨師ヲ  
 シテ之ヲ問ハシムルコトアルヘシ  
 第百拾二條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ル、トキハ之ヲ  
 免スコトヲ得  
 第百拾三條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ  
 違背シタルトキハ七日以下之ヲ拘置スルコトヲ得

〔典獄(檢印)〕懲治人名籍

横線以下朱書

主檢

書記(名氏印)

本出生地	何國郡(町村)産
管地籍名	何某
氏名	某年某月某日生
年	當何年何月何年何ヶ月
懲治人及ヒ尊屬親ノ營業	懲治人ノ營業 主願者タル尊屬親ノ營業
親屬	父母兄弟及ヒ偶者等ノ有無
入場ノ年月日	明治何年月日午(前後)第何時入場
入場ノ事狀	
身材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容音貌聲	而體毛其目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態 其他瘰癧瘰癧子癭瘤黑痣癩風天黥創癩ノ類及 ヒ音聲ノ高低テモ細緻ニ具載ス



教育門及	入場ノ時文字ヲ知ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 入場後進學ノ景況 何宗或ハ宗門不詳
入場中ノ賞罰	明治何年月日ノ何賞罰ヲ行フ
書信贈答ノ月日	何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信(發來)
懲治場ニ留置ノ宣告ヲナセシ裁判所	明治何年月日何日某裁判所ニ於テ若干年月日留置ノ宣告
曩ニ處斷ヲ經シ者ナル時ハ其事由	犯由ノ大畧及ヒ某裁判所
事變	明治何年月日病死或ハ變死或ハ逃走或ハ他監ニ移ス
放還	明治何年月日某家ニ放還

(典獄(檢印))未決者名籍

主檢 書記(氏名印)

横線以下朱書

本出生	某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女 何國郡(町村)産 何某 某年 月 日 生 當何年何月何年何ヶ月
年氏族	何國郡(町村)産 何某
管地籍名	何國郡(町村)産 何某
營業及ヒ親屬	營業ヲ詳記ス可シ 父母兄弟及ヒ記偶者子孫ノ有無
乳兒提携	男或ハ女 收監ノ時何歳何ヶ月
入監ノ年月日時及ヒ罪件	明治何年月日(前後)第何時入監 何罪ヲ犯ス
身材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容貌音聲	毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態 其他痘斑癩疥癭瘤黑痣癩風天點創癩ノ類及 ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス

監獄則







身 材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容貌 音聲	面體眉毛目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態 其他瘰癧癩子癭瘤黑痣癩風天黥創瘢ノ類及 ヒ音聲ノ高低テモ細緻ニ具載ス
教育及ヒ宗門	文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀 書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳
入監中ノ賞罰	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ
書信贈答 ノ年月日	明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ 書信(發來)
假出獄免幽閉	明治何年月日何日假出獄或免幽閉
事 變	明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監 或ハ何罪ヲ犯シ復々未決監ニ入ル
終 結	明治何年月日滿期放免又ハ特赦

假出獄ノ證票

某管下國郡村町番地住又ハ何某子弟妻女

族籍

何 某

某年月日生

明治何年何月何年  
何ヶ月

身 材

名籍ノ樣本ニ倣  
ヒ詳記スヘシ

監禁期



容貌

上ニ同シ

罪質犯數

刑名刑期

及ヒ附加刑

何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受

ケ何年月日ヨリ執行何年月日滿期

一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何地ヘ約子何日迄ニ到着シテ即時其地ノ警察官ニ届出テ此証書ヲ納メタル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事

一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルキハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事

一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滯留スルトキハ滯留地ノ警察官ヨリ其証書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此証書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル事  
右之通心得サセ假出獄ノ証票與フル者也

署 某監獄署

明治何年 月

日 印

長官何某

印

△假出獄ヲ受タル者所有金アルトキハ此証書ノ裏面若ク

ハ欄内ニ左ノ二款ヲ附記スヘシ

一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送り遣シタル事

一警察官ヘ送り遣シタル金圓ハ其居住地ニ到着ノ後何日ニテ

監獄則



何管下(某)監獄署○在監人信書○明治年月日

モ受取得ヘキト雖モ同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上  
ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サ、ルヘキ事

八百九十四

料紙半紙

〔括弧〕内朱書

- 一 在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ
- 一 書信ノ文句規則ニ背キタルヲアルトキハ其送致ヲ止メ仍ホ相  
當ノ罰ニ處スルヲアルヘシ

監獄則

八百四十二



何管下某監獄署○在監人信書紙○明治年月日

モ受取得ヘキト雖モ同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上  
ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サ、ルヘキ事

八百九十四

料紙半紙

〔括弧〕内朱書

- 一 在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ
- 一 書信ノ文句規則ニ背キタルコアルトキハ其送致ヲ止メ仍ホ相  
當ノ罰ニ處スルコアルヘシ

監獄則

八百四十二



囚徒服役時限表

月名	時限	起	床就	役	小	憩	午	飯	罷	役	晚	飯	還	房	服役時
一月	午前七時	午前八時	午前八時	午前八時	午前九時	正午	正午	午後三時	午後三時	午後四時	午後四時	午後四時	午後四時	午後四時	六時
二月	六時三十分	七時三十分	七時三十分	七時三十分	八時	九時	十時	十一時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	六時
三月	六時	七時	七時	七時	八時	九時	十時	十一時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	六時

八月	七月	六月	五月	四月
五時十分	四時十分	四時十分	五時十分	五時十分
六時十分	五時十分	五時十分	六時十分	六時十分
同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上
四時十分	五時十分	五時十分	五時十分	四時十分
十一時十分	十一時十分	十一時十分	十一時十分	十一時十分
六時十分	七時十分	七時十分	六時十分	六時十分
八時十分	八時十分	九時十分	八時十分	八時十分







キチ保  
 ツ能ハ  
 ス故ニ  
 月毎ニ  
 大平均  
 ナテ姑  
 シテ起  
 ク其刻  
 床時載  
 ナ登載  
 ス各地  
 ノ司獄  
 官此表  
 ノ區分  
 ナ準ト  
 ナシ宜  
 シ裁酌  
 シテ役  
 囚チ適  
 スヘシ

第六十二章 裁判所ノ召喚ニ對シ遅不參スル者處分方

○明治十年一月十七日第五號布告

凡ソ裁判所ノ呼出チ受ケタルモノ疾病等ノ事故アリテ遅參又ハ  
 不參スルキハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ届出ヘ  
 シ若シ右刻限ヲ過キテ届出ルカ又ハ無届ニテ遅參不參スルキハ  
 裁判官ニ於テ直ニ五錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ右布告候  
 事

裁判所ノ召喚ニ對シ遅不參スル者處分方



第六十三章 法律規則中罰例ニ係ルモノ處分方

○明治十四年十二月二十八日第七拾二號布告

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付キ法律規則中罰例ニ係ルモノハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

第一條 凡ソ懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ勾留ニ處ス

第二條 凡禁獄及ヒ禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ勾留ニ處ス

第三條 凡ソ罰金及ヒ科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未満ヲ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四條 法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ答可申付トアルハ總テ貳圓以下百圓以上ノ罰金ニ處ス

第五條 法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ヲ再犯加重及ヒ數罪俱

發ノ例ヲ用ヒス

第六條 法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ據テ處斷ス

第七條 前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スルモノト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但シ始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得



第五卷 訴訟手續

第六拾四章 治安裁判所及始審裁判所權限

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス

但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限リニアラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價格百圓未滿ノ訴訟ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ルヘカラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價格百圓以上并ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス

但シ控訴手續ハ第二編ニ示ス處ト同シ

(追加) 始審裁判所ハ人民ヨリ郡區長ニ對スル訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス



第六拾六章 控訴裁判所權限

控訴裁判所ノ權限ハ許多ノ變革ヲ經今日ニ至テハ左ノ二權限ニ過キス

第一 控訴裁判所ハ管轄内始審裁判所ノ始審裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ覆審ス

第二 人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ヲ裁判ス

但シ院省府縣ニ對スル訴訟ハ司法卿へ奏請ノ上之ヲ受理ス

第六拾七章 大審院權限

第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ統一ヲ主持スル所トス

第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ依リ大審院自ラ之ヲ判決スル事ヲ得

第三條 已ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又大審院ノ旨ニ循ハサル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

第四條 陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條 (零之)

第六條 内外交渉民刑事事件ノ重大ナル者ヲ審判ス

第七條 (零之)

(追加) 人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ノ上告ハ司法卿へ奏請ノ



上之ヲ受理ス

第六拾八章 裁判所取締規則

第一條 訟庭ハ訴訟口詰必ス出席シ訴訟人ヲ順序ニ呼込ニ裁判官ノ命ニ從ヒ失敬又ハ紛聞ノ事アラサル様其取締ヲ爲スヘキ事

第二條 原被告人ヲ始メ代言人等總テ訟庭ニ出ル者ハ呼込ノ次第二ニ從ヒ沈黙整列シ裁判官出席スレハ各々起テ禮ヲ爲スヘシ  
第三條 原被告共其事情ヲ餘濫ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシトイヘ互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタル後ニ非サレハ更ニ其言ヲ發スヘカラス

第四條 凡ソ進退動作ハ輕躁ニ涉ラス言語ハ憤怒高激ニ涉ラス諄々トシテ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意スヘシ

第五條 前條ニ記載シタル事ヲ守ラス裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク

裁判所取締規則



者アル片ハ裁判官直ニ譴責ヲ加フヘシ

第六條 譴責ヲ加フヘキ者アル片ハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カシメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第七條 裁判官ヲ嘗ル者アル片ハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科ス可キ事

第八條 裁判ノ時公聽ヲ許サレタル者ハ人々皆沈黙敬聽スヘシ但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛聞ニシテ審問ノ妨礙アリ

ト思量スル片ハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシムヘシ

第六拾九章 勸解手續

夫レ勸解ハ權利者義務者ノ願意ニ隨ヒ其證據物ノ有無ニ拘ハラズ双方ノ私情ヲ酌料シ説諭ヲ加ヘ和解ニ至ラシムルヲ主トスル者ナルガ故ニ其出願ノ手續ニ至リテモ亦簡便ヲ主トシ假令無筆或盲ノ者タリモ其情實ヲ陳述スルニ於テ差問ナキ様ニナスヲ要ス故ニ其願書モ只半紙ヲニツ折ニシテ其前半面ニ出願ノ要領ヲ掲クルヲ以テ足レリトス今其例ヲ示サンニ貸金催促ノ如キニ於テ通常左ノ雛形ノ如ク認ムルモノナリ

府郡町何番地  
何縣區村何番地

華士族平民

原告 何 某 印

若代人ナレハ右ノ次ニ代人ノ住所身分ヲ書シ署名捺印スヘシ但本人ハ捺印スルニ及ハス

貸金催促之勸解願

勸解手續



元金何圓  
年月日貸付  
年月日期限  
利子何圓  
合金何圓請求高  
何年何月何日

何府何郡何町何番地  
何縣何區何村何番地  
華士族平民  
被告 何 某

凡ソ勸解ヲ出願スルニ付テハ右ノ如ク其要領ヲ舉クルコトヲ要ス  
レモシ簡畧ニ記載シ難キ訴訟例ヘハ地處境界論ノ如キニ於テ  
ハ目安ト原被告人ノ氏名ヲ書スルヲ以テ足レリトス  
勸解出願スルニ付テハ願書ハ通例一般ニ要スル者ナレモシ無  
筆文官等ニテ認メ難キ時ハ治安裁判處ニ出頭シ其情實ヲ陳述ス  
ルコトヲ得ヘシ  
勸解ハ其爭論ノ始末ヲ本人ヨリ直ニ聞取ルニアラサレハ事情ヲ  
盡シ難ク隨テ説諭ノ上和解ニ至ルヘキ事柄モ却テ整ハサル様ノ

コアルカ故ニ可成丈本人自ラ出頭セサルヘカラス但シ本人疾病  
等不得已事故アル片ハ親屬又ハ相當ノモノヲ以テ代人トシテ出  
頭セシムルノ許可ヲ仰クヘシ斯ル時ニハ本人ヨリ代人願ト委任  
狀トテ代人ニ渡サ、ルヘカラス又勸解ニハ代言人ヲ用ユルコト  
得テ代人トシテ差出ス事ヲ得ヘキノミナリ

代人許可願ノ書式

代人許可願

一何府縣郡區町村番地〔華士族或ハ平民〕〔原被告〕何某へ〔或ハ  
ヨカ〕係リ〔何々一件〕御勸解上願致候ニ附テハ自身出頭可仕之  
處〔別紙醫按ノ通疾病ニ附〕或ハ不得止事故有之候ニ付別紙戸  
籍寫ノ通親屬〔或ハ故舊ナル〕何某ヲ以一件結局迄代理爲致度最  
トモ彼ニ上仰且御請致ス事柄共將來自分ヨリ異儀申上間敷候  
條御許可被成下度別紙相添連署ヲ以此段奉願上候也

勸解手續



何府縣郡區町村番地身分職業

年月日

原被告

何

某印

何府縣郡區町村番地身分職業

代人

何

某印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ノ代人許可願ヲ預メ管轄裁判所へ捧呈シ許可ヲ得テ后更ニ勸  
 解又ハ本訴ヲ仰ツヘシ其際該聽屆ノ証ヲ添ユルモノナリ本訴モ  
 又之レニ同シ  
 一醫師ノ容体書ニハ當人ノ住所身分職業年齢、病名、投劑、經過、  
 豫期、等ノ記載ニ注意アル可シ  
 一親屬タルヲ証スニハ本人及代人双方戸籍ノ寫及戸長ノ保証  
 書ヲ要ス

一委任狀書式左ノ如シ

委任狀

拙者儀病氣ニ付何某ヲ以テ部理代人ト相定メ拙者ノ名儀  
 ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事  
 一何々ノ事（委任スヘキ權限ヲ分項記載スヘシ例ヘハ貸  
 金催促ノ原告タルトハ「拙者ヨリ住所身分氏名ヘ相係  
 ル貸金催促勸解願一件ニ付キ某裁判所ニ於テ結局迄辨  
 論一切ノ事」ト書スヘシ若シ被告タルトハ住所身分氏  
 名ヨリ相係ル貸金催促勸解願一件ニ付キ某裁判所ニ於  
 テ結局迄答辨一切ノ事」ト書スヘシ  
 右代理委任狀仍而如件

住所身分

何某印

年月日



本人ヨリ委任ヲ受ケタル代人ニ於テハ代人願診斷書並ニ委任狀  
 寫テ訴狀ニ添ヘテ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ  
 裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理セラレタルハ被告人ヘノ呼出狀ハ使  
 丁ヲシテ被告ニ之ヲ送達セラレ、チ以テ原告ハ其送達賃ヲ使丁  
 へ拂フ可シ而シテ右呼出狀ニハ番號記載アレハ宜シク之ヲ留メ  
 置クヘシ掛官ハ出訴ノ當日ヨリ定マルアリ或ハ其翌日定マルモ  
 アリテ各裁判所ニ依リテ其成規異ナレハ出頭スル者ハ其心得ニ  
 テ少シク注意スレハ直ニ之ヲ知ル事ヲ得ヘシ  
 凡ソ何ノ時ヲ問ハス裁判所ニ出ツルニハ必ス名刺ヲ持參スヘ  
 シ而シテ名刺ノ數ニ至リテハ東京大阪ノ如キ僅々ノ裁判所スラ  
 尙ホ異同アルヲ免レサレハ况シテ全國無數ノ裁判所ニ於テハ其  
 數モ亦一定セサルヘシ茲ニ其大畧ヲ擧ケンニ先ツ概テ半紙ニツ  
 切ニ認メタル名刺ニ枚ヲ要シ或ハ半紙四ツ切ニ認メタル名刺一

枚ヲ要スルヲ通例トセリ借テ名刺ノ認メ方ハ左ノ通り

名 刺 離 形

何年第何號	(新タニ訴フル時ハ)
御掛何某殿	只新訴ト書スヘシ
何々ニ付頭	原被告何 某
年月日時	原被告何某ヘ係ル件

已ニ勸解ノ日時定マリタルハ原被告各其當日ニ裁判所ニ出頭シ  
 前ニ掲ケタル名刺ヲ裁判所ノ受付ニ差出シ置クヘシ若シ又被告  
 トナリテ裁判所ヨリ召喚ヲ受ケテ出頭シタルハ召喚狀ヲモ名  
 刺ニ副ヘテ差出スヘシ出頭ノ上ハ訴訟口詰ノ呼込ニ應シテ訟  
 庭ニ入ルヘシ



訟庭ニ入りタル上原被告裁判官ノ勸解説諭ニ依リ双方示談相整  
ヒ濟口トナリタルキハ左ノ如キ書式ニ從テ其趣意ヲ認メ差出ス  
ヘシ

第何號

何<sup>郡</sup>何<sup>町</sup>何<sup>村</sup>何番地

御掛何某殿

身分

何 某

何々之勸解願濟口御届

何<sup>郡</sup>何<sup>町</sup>何<sup>村</sup>何番地

身分

被告人 何 某

「此處ニ濟口ニ至リタル事由ヲ書スヘシ例スレハ貸金催促  
ナラハ請求高ノ内何圓ハ當日受取何圓ハ証文ニ直ス等其  
濟口トナリタル事由ヲ書スルコナリ」

右私共ヨリ何々ノ義勸解奉願候處御説諭ニ基キ前書ノ通  
濟方相成候間此段御届申上候以上

右

年月日

原告人

何 某 印

被告人

何 某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

又金錢上ノ勸解願ニテ被告人ニ於テ身代限ヲ以テ濟方オナス  
ハ左ノ如キ書式ニ從ヒ其事由ヲ認ムヘシ

第何號

身代限濟方對談書

御掛何某殿

一元金何圓

一利金何圓

勸解手續



合金何圓

内

一、金何圓

差引

御勸解中抵當家屋公賣代受取

殘金何圓 滯金

私共貸金催促之儀御勸解奉願候處御説諭ニ基キ被告何  
某儀償却方相辨候處金圓調達願候ニ付前書滯高身代限  
以テ濟方致候等示談行届候此上右御處分被成下度此段奉  
願候也

何郡何町何番地

年月日

原告人

何

某

印

何郡何町何番地

被告人

何

某

印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ニ裁判所へ差出ス片ハ區役所或ハ戶長役場へ宛テタル封書ヲ  
下附サル、モノナリ此時左ノ如キ請書ヲ呈ス

何號

掛何某殿

御請書

一何區役所或ハ戶長役場へノ封書

壹通

右正ニ請取申候至急區役所へ差出可申候依テ御受書如件

年月日

住所

何

某

印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ノ手續ヲナシタル上財産調へモ濟ミ身代限處分揭示後六十日  
間ヲ過キ財産公賣ノ上原告人ニ於テ金圓ヲ請取リタル片ハ左ノ  
如キ書式ニ從ヒテ認メタル書面ヲ出スヘシ

勸解手續



御請書

一金何圓  
一御裏書濟証書

何通

右ハ何郡區町村へ係ル貸金催促ノ末身代限ヲ以テ濟方可  
仕旨原被連印ヲ以テ申上置本日財産公賣代金前書ノ金額  
御下ケ渡シノ上殘額証書へ御裏書御下付相成正ニ受取申  
候仍テ御請書如件

住所

年月日

原告人

何

某

印

某治安裁判所長

判事補何某殿

若シ又被告ニ於テ原告ノ請求スル處ヲ拒ミ之ニ應セサルハ其  
勸解ハ不調トナルナリ如此場合ニ於テハ裁判官ノ命ニ依リ或ハ

証書ノ寫シ或ハ其請求ノ趣意書ヲ差出シ不調籤ヲ乞ヒ請クヘシ  
不調籤ハ後日出訴ノ時ニ於テ入用ナル者ナレハナリ  
証書寫ノ認メ方ハ左ノ如シ

証書寫

何々(此處ニ証書ノ全文ヲ寫載ス)

右寫之通ニ相違無御座候

住所

年月日

何

某

印

某治安裁判所長

判事補何某殿

趣意書ノ認メ方ハ左ノ如シ

趣意書

自分ヨリ今般何某へ掛リ何々ノ勸解出願仕候趣旨ハ左ニ



陳述可致

(此處ニ勸解出願ノ趣旨ヲ書載スヘシ)  
右之通ニ有之候也

住所

年月日

原告人

何

某

印

某治安裁判所長

判事補誰某殿

右ノ証書ニ不調ノ付箋ヲナシ又ハ特ニ之レヲ下附サレタル片ハ  
左ノ如ク認メタル受書ヲ差出スヘシ

御係何某殿

御請書

第何號

一不調箋

壹葉

右ハ被告何某ヘ係リ勸解奉願上候處本日不調ニ據リ御下

付相成正ニ領收致候仍テ御受書如件

何府縣郡區町村番地身分

年月日

原告

何

某

印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ニ述ヘタル所ハ出願ノ日ヨリ結局ニ至ルマテ故障ナシ濟ミタ  
ル者ナレトモ或ハ被告人ノ不參シテ出庭セサル如キ事不少或ハ又  
假令ヒ被告トナルモ無余儀事ニテ當日召喚ニ應シ難キコトアリ或  
ハ示談濟口ヲナサンカ爲メニ猶豫ノ期限ヲ乞フコトアリ其他種々  
ノ故障生シ來ル者ナレトモ一々茲ニ掲載シ難レハ只々其ノ大体ニ  
基キ臨機應變之ニ當ラレシコトヲ希望スルノミ今茲ニ其主タル者  
ヲ掲載セン  
原告又ハ被告人ニ於テ不止得事故アリテ不參或ハ遲參セントス

勸解手續



ル時ハ其趣ヲ出頭時刻前ニ願出ツヘシ

遅刻(不参)御届

番號

何郡何町何番地

御掛何某殿

原(被)告

何

某

右ハ何郡區町村番地何ノ某へ掛ル(被告ナレハ「何ノ某」ヨリ掛ルト書ス)何々ノ件ニ付キ本日出頭當日ニ付キ私儀例刻出頭可仕處何々(事故又ハ病氣ノ次第ヲ記ス)ニテ出頭致兼候ニ付何日何時迄御猶豫被成下度此段奉願上候也

右

年月日

何 某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

又無届ニ付不参シ始末書ヲ差出ス時ハ左ノ書式ニ從フテ其旨ヲ

認ムヘシ

始末書

番號

住所 身分

御掛何某殿

生國

何 某

何宗

本月何年何月

右何郡區町村番地身分何某ヨリ係ル何々之件ニ付キ昨幾日例刻出頭可仕之處何々ニテ(其事故ヲ書ス)竟ニ無届不参仕候段奉恐入候  
右之通り相違無之候也

右

年月日

何 某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

勸解手續



又被告無届ニテ不參シタルトキ原告人ニ於テ召喚願ヲ差出ス書式ハ左ノ如シ(引立願ヲ乞フ書式ハ次節ニ記シアルヲ以テ略ス)

被告御召喚願

番號 住所 身分

御掛何某殿 被告 何 某

何月何日出

右者本日御喚出(或ハ延期)當日不參仕候ニ付頭書ノ當日本人御呼出被下度奉願候也

郡 町 何番地

年月日 原告人 何 某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

但被告ニ於テ使丁賃不拂ノ際ハ原告ヨリ收納致可申候

又原被示談行届キ延期ヲ乞フ時ニハ左ノ書式ニ從ヒ其旨ヲ認ム

延期願

番號 住所

御掛何某殿 原告 何 某

住所

被告 何 某

右何々(其訴名ヲ記ス)御勸解奉願候處今般双方示談行届キ候間右取運ヒ中來ル何月何日迄延期御猶豫被成下度此段奉願候也

年月日 右 何 某 印

右 何 某 印



某治安裁判所長

判事補何某殿

(本節ノ法理) 勸解ハ只一ノ説諭ニ止マルモノナレハ原被其説諭ニ從ハサレハ裁判所ニ於テハ強テ從ハシムル能ハス只不調トシテ斥クルニ止マルモノナリ此故ニ原被始メハ裁判官ノ説諭ニ從ヒ濟口ヲ契約シオキナカラ後日ニ至リ其濟口通りニナサ、ルモ裁判官ハ被告ニ迫テ濟口通り執行セシムルノ權ナキ者ナリ

(本節ノ注意) 凡ソ裁判所ニ出ツルニハ必ス實印ヲ携帶スヘシ是レ特ニ治安裁判所ノミニアラズ何レノ裁判所ニ出ヅルニモ必ス忘レサル様注意スヘシ

治安裁判所ニ於テ勸解ヲ受クルキニハ證據物アラハ悉ク携帶スヘシ提出シタル證書ニハ掛官ノ認印ヲ受ケオクヘシ

治安裁判所ニ出ス書類ハ凡テ半紙ヲ以テスヘシ又訴訟印紙ヲ用ユルニ及ハス是レハ勸解ニ於テ然ルモノニシテ治安裁判所ニ於テ始審ヲ受クルキハ通常始審ノ裁判ト同シナリ次節始審ノ手續ノ部ニ詳カナリ就テ見ルヘシ

勸解双方トモ必ス本人自ラ出頭スヘシ何ントナレハ勸解ハ固ト説諭ノ上和解ヲ主トスル者ナレハ代人等ニテハ事情ヲ詳カニシカタク且ツ代人ニ於テハ利害ノ關係并ニ道德上良心ヲ責ムルノ感覺薄キ者ナレハ容易ニ説諭ニ從ヒ和解シカタキノ傾向アルヲ免レサレハナリ若シ不得已ノ事アルキハ其代人トシテ親戚又ハ定リタル雇人ヲ出スヘシ是レ等ハ由縁ナキ他人ヨリ大ニ勝ル所アレハナリ仍テ再ヒ茲ニ復説スル勸解事件ニ付キ係リ官番號等定リタルキハ宜シク記憶シオクヘシ若シ然ラサルキハ大ニ紛雜ヲ起スアルヘシ又書面



等ヲ差出スニハ必ス係リ官及ヒ番號ヲ記載スヘキモノトス  
原告ノ手ヨリ召喚狀ヲ被告人ニ渡シタルキハ必ス受取証ヲ  
取リ置クヘシ是亦後日被告ノ出頭セサル時之ヲ責ムルノ証  
憑トナス可キ者ナレハナリ然レモ若シ召喚狀ヲ原告ニ渡サ  
スシテ裁判所ヨリ直ニ被告ヘ送附スルノ地方ニ在リテハ此  
限リニアラス

訴訟事件ハ必スシモ勸解ヲ經サレハ出訴スルヲ許サレニ  
ハアラス其事ハ前節權限ノ部ニ掲載シオケリ就テ見ルヘシ  
聊カ注意ノ爲メニ一言シ置クニ爾リ

第七拾章 始審手續

侵害セラレタル權利ヲ回復セシカ爲メニ義務者ハ治安裁判所へ  
訴へ勸解ヲ乞トイヘトモ義務者不當ノ陳言ヲナシ願乎トシテ我  
カ要求ヲ拒絕スルニ當リテハ權利者ハ亦勸解ニ依頼シテ其權利  
ヲ回復シ得ヘカラス必スヤ其他ニ救正ノ途ヲ求メサルヘカラス  
而シテ其途タル只之ヲ治安裁判所へ訴タレハ出ツルニ外ナラサル  
ナリ而シテ治安裁判所ハ其權限タル甚タ狭マケレハ勸解不調ト  
ナリタル事件ニ付キ出訴スル者アルモ悉ク之ヲ受理スルヲ得ス  
唯金額百圓ニ滿タサル事件ヲ受理シテ裁判スルヲ得ルノミ始審  
裁判所ハ之ニ反シ金額百圓未滿ノ事ヲ除キ其余ノ事件ヲ受理シ  
テ裁判スルコトヲ得其詳細ナルハ載セテ裁判所權限ノ部ニ在リ  
如此治安裁判所ト始審裁判所トハ其權限ヲ異ニスルニ拘ハラズ  
勸解不調トナリタル事件ヲ受理シテ始テ審判ヲ爲スハ同一ナ

始審手續



レハ共ニ之ヲ始審ト稱シ出訴ノ時ヨリ審判ノ日ニ至ルマテ其手續ハ全ク相ヒ同シ始審ノ出訴ヲナスニハ先ツ其出訴ノ趣意ヲ詳ラカニ認メタル訴狀正副二冊若シ證據物アレハ其寫二冊ニ勸解不調籤ヲ添ヘ其且正本ニ相當印紙ヲ貼用消印ノ上名刺ト共ニ裁判所ニ呈スヘシ

若シ代人ヲ以テ出訴スル時ハ前節ニ記載シタル委任狀寫ト聞濟指令附代人願トテ裁判所ニ捧呈スヘシ  
此ニ用ユル代人許可願ノ書式ハ前節ニ掲クル者ト異ナルヘシ  
但シ代人ヨリハ左ノ上申書ヲ呈スヘシ

上申書

原告何某ヨリ被告何某ヘ係ル何ノ詞訟受任ノ事件外ニ訴訟又ハ執行願等ニ至ル迄他ニ受任ノ事件無御座候  
右上申仕候也

何郡何町何番地

年月日

原被告代人

何

某

印

所長宛

訴狀ニ與書ノ上原告人ニ之ヲ示サレタルキハ左ノ雛形ノ如キ受取書ヲ裁判所ニ呈スヘシ而シテ訴狀ハ使丁ニ於テ被告方ヘ送達スヘシ

第何號 御請書

何府縣郡區町村身分被告何某ヘ係リ何々一件本日起訴致候處御受理ノ上訴狀ヘ御添書使丁ヲシテ御送達而シテ原告義ハ何月幾日刻証據物携帶出廷可致旨御達之趣奉畏候仍テ御請書如件  
何府縣郡區町村番地身分

年月日

原告

何

某印

始審手續

九百三十五



某始審裁判所長

判事何某殿

原告自カラ訴狀ヲ被告人ニ送達シタルキハ左ノ離形ノ如キ受取書ヲ取り置クヘシ

何年何號

一 奧書訴狀

壹册

右正ニ受取申候也

年月日

何 某 印

何某殿

被告ニ於テハ訴狀ヲ受取タルヨリ一週間内ニ答書正副二通若シ証據物アレハ其寫本貳冊ト共ニ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ若シ代人ヲ用ユルコトアラハ前節ノ離形ニ準シテ之ヲ認メ裁判所ニ捧呈シテ許可ヲ乞フヘシ

被告ニ於テ附シタル答辨書ヲ原告ニ於テ受取リタル上尙ホ新タニ答辨スヘキ事項アラハ前同様ノ手續ヲ以テ辨論書ヲ出スコトヲ得其後裁判所ニ於テハ日時ヲ定メ原被兩造對審ヲ開カル此時原告共ニ出庭シテ充分ニ訴訟事件ヲ開陳シ訴狀ニ書キ盡セテ事情ヲモ陳述スルコトヲ得ヘシ對審終リシ後原被兩造共ニ其事情ヲ書シテ亦餘濫ナク陳述スヘキ事項モナク提供スヘキ証據モ全ク盡クルニ至ルキハ之ヲ稱シテ結審ト云ヒ之ヨリ裁判言渡アルヘキナリ裁判言渡アリテ裁判狀ヲ下附サル、キハ左ノ如キ受書ヲ差出スヘシ

御 受 書

何年何號 原被告何某へ係ル何々一件

一 裁判言渡書

壹通

右ハ本日御言渡ノ上御下附相成リ正ニ奉受取候也

始審手續



右  
年月日 原告 何 某 印  
所長 宛

以上述へタル處ニテ大畧始審手續ハ尽キタル如クナレモ實際ハ中々如此無滯結局ニ至ルコトハ稀ナルモノナリ加之尙ホ手續上必ス爲サ、ルヲ得サルノコトモ或ル場合ニ於テ生スル事ナシト云フ可ラサレハ變ニ應スルノ手續ヲ之ニ示スヘシ  
被告タル者不參シテ召喚日ニ出廷セサルキハ原告ニ於テハ何日ニ召喚アラントナリ請フコトヲ得ヘシ其認メ方ハ左ノ如シ

番 號 御召喚願  
係官名 住所 身分  
何月幾日出 被告 何 某  
右ハ本日御召喚之處出庭不仕候自分繁忙之身ニテ空シ

時日ヲ費候テハ困難不少候ニ付キ頭書ノ當日出庭可致縁御召喚被成下度此段奉願上候也

住所 身分  
年月日 原告 何 某 印  
所長 宛

被告ニ於テ不參スルコト數々ニシテ三四回モ召喚ニ應セサルキハ裁判所ニ請願ノ拘引スルコトヲ得ヘシ其書式ハ左ノ如シ

御引立願  
住所 身分  
被告 何 某

右ハ度々御召喚相成候得共毎度不參致シ出廷不仕爲メニ訴訟事件モ延滞仕リ原告ニ於テ迷惑不少候被告ニ於テ出廷不致ハ畢竟訴訟ヲ延滞ナサシメ原告ノ權利ヲ蹂躪スル

始審手續



ノ心意ニ出テタル者ト推察致候ヘハ此上幾度御召喚相成候  
候出廷不仕ハ必然ノコト存候間何卒公方ヲ以テ速ニ御引立被成下度此段奉願上候也

住所  
年月日  
原告  
何 某 印  
所長宛

原告又ハ被告ニ於テ疾病等不得已事故アリテ出庭致シ難キ時ハ其前日若クハ當日早朝裁判所ニ申出テ猶豫願ヲ爲スヘシ其書式ハ左ノ如シ

御猶豫願

御廳何年何號件ニ付本日御召喚ノ所何々（疾病等不得已事故ヲ書スヘシ）ニ付頭難致候間來何日午前第何時迄御猶豫被成下度然ル上ハ右同日同刻必ス出頭可仕候間何

何卒御聞濟被成下度此段奉願上候也

住所  
年月日  
原（被）告  
何 某 印  
所長宛

原被両造共ニ對審中ニ於テ發見シタル事故若クハ訴狀ニ洩レタル事等アラハ結審ニ至ルマテハ何時ニテモ書面若クハ口上ニテ申立ルヲ得ヘシ口上ニテ申述ヘシトセハ尙ホ對審ヲ開カレンコトヲ請願スヘシ書面ニテ出ス片ハ之ヲ辨論書トシテ出スヘシ此等ノ書面ハ何レモ一通ヲ差出スヘシ  
訴訟中被告ニ於テ訴訟ノ目的タル物件ヲ破壞險匿若クハ他ニ運出セントスル恐レアル片ハ原告ハ其物件ノ差押ヲ裁判所ニ請求スルヲ得ヘシ又其訴訟ノ目的タル物件ハ被告ノ行爲ニシテ若シ被告ニ於テ依然其行爲ヲ繼續スル片ハ爲メニ原告ニ於テ損失ヲ



受クヘキト明瞭ナル時ハ其行爲ノ停止ヲ裁判所ニ請願スルヲ得  
ヘシ又原告ノ請願ナシトイヘニ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ行フヲ  
得ヘシ然レニ審理ノ末原告ノ曲者ニ歸シタル并被告ノ損失ヲ償  
ハシメシカ爲メニ保証金トシテ當初原告ハ被告ノ請求又ハ裁判  
所ノ命令ニ從テ若干ノ金圓ヲ裁判所ニ預ケ置カサルヲ得ス然ラ  
ズノハ通常差押ヲ請願スルヲ得サルナリ此ノ請願ハ裁判確定ニ  
至ラサル間ハ何時ニテモナスコトヲ得

第七拾一章 控訴上告手續

第一章 控訴ノ事

第一條 凡ソ地方裁判所(即チ現今始審裁判所)ノ初審ニ服セズ  
シテ再ヒ上等裁判所(即現今控訴裁判所)ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル  
者之ヲ控訴ト云フ

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス

第三條 控訴ハ一ヌヒスルコトヲ得再ヒスルコトヲ得ス

第四條 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲナシタル并原告被告ノ  
双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル并ハ裁判言渡シヨリ第七  
日マテニ(裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ)裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ  
其翌日ニ至リ控訴スルコトヲ得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ  
急速ニ控訴スルコトヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴  
スルコトヲ得



第五條 地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ三ヶ月（三十日）ヲ以テ一月トス（現今ハ三ヶ月ヲ改メテ二ヶ月ト定メラシメタルハ六十日内ニ控訴セサルヘカラス）ヲ過クルルハ控訴スルコトヲ許サス但シ地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ期限三ヶ月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フヘシ

第六條 控訴ヲナス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アルハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章 上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求

ムル者之ヲ上告ト云フ

第拾條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ

- 第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ
- 第二 聽斷ノ定規ヲ乖シ
- 第三 裁判法律ニ違フ

第拾一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ受理セス

第拾二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ超ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコトヲ得

第拾三條 凡上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルコトヲ得ス

第三章 民事上告ノ事



第拾四條 民事ノ上告スルヲ得ル者ハ已ニ上等裁判所ニ控訴  
シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第拾五條 上告ヲ爲サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上  
告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス  
若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月  
ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過クレハ上告スルヲ許サ  
ズ

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

- 第一 原告人ノ住所身分氏名
- 第二 被告人アレハ其住所身分氏名
- 第三 被告人ノ住所身分氏名
- 第四 証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名
- 第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月  
日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月  
日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日  
上告狀ハ正本壹冊副本五冊ヲ差出スヘシ  
上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

- 第一 地方裁判所ニ於テ入訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡  
書ノ寫
- 第二 上等裁判所ニ於テノ書類并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書  
ノ寫
- 第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱  
書シ編シテ壹冊トナシ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊ト  
爲シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁



判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟廷ニ取下ケ見座ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヲ得ヘシ

若原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第拾六條 上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサル時ハ上告ヲ爲スヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサル時ハ其預リ金ヲ没入ス  
第二 若シ上告ヲ取リ上ケ原裁判ヲ破毀シタルキハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取リ上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云フ

第拾七條 上告ヲ爲ス者ハ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第拾八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス（大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ大審院ヨリ郵便ヲ發ス）執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ致テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシム可シ

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル裁判ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第拾九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第貳拾條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル所ハ何々ノ理由ヲ以テ上告受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第貳拾一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ



旨ヲ言渡シタルハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ  
此呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添ユヘシ

第貳拾二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日內ニ答辨  
書ヲ作り自身又ハ代言人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人  
ノ所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ八里毎ニ一日  
ヲ増スヘシ

第貳拾三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長  
ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩  
ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三  
日以前ニ原被對審ノ呼出狀原被双方ニ送達スヘシ  
第貳拾四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件  
始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ  
論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何々

ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付キ更ニ某裁判所  
ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言  
渡スヘシ

第貳拾五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由  
ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ  
(本節ノ注意) 控訴ヲ爲サントスル者ハ控訴ノ届ヲ原裁判所  
ニ差出スルハ第一章第六條ニ定ムル所ナリ茲ニ其書式ヲ掲  
ク

控訴御届

原被告何某ハ係ル何年第何號件去ル何月何日ヲ以テ裁判  
御言渡相成候處右ハ服ス能ワサル處有之候ニ付今般控訴  
仕候間此段御届仕候也

住所

控訴上告手續



年月日

何 某 印

某始審(或ハ安治)裁判所長

判事何某殿

凡ソ控訴裁判所ニ新訴スル件ニハ常ニ所長ノ名宛ヲ以テス  
ルトイヘトモ掛官ノ定マリタル後ハ必ス該官ノ名宛ニテ差  
出スヘシ

控訴裁判所ノ判決ヲ不法若クハ不當トシ大審院ニ上告セシ  
トスル者ハ其旨ヲ原裁判所ニ届出ツヘシ其書式ハ前ニ掲ケ  
タル控訴届ト大同小異ナレハ茲ニ贅セス  
上告チナスニ要スル書類ハ第二節第十五條ニ記載シタルモ  
ノ、外尙ホ上告届ノ寫上告通知書ノ寫宿所届チモ添エテ呈  
スヘシ其外委任ヲ受ケタル代人ニ於テハ代人願委任狀ヲ添  
ヘテ差出スハ勿論ノ事ナリトス控訴ニ於ケルハ同シ

サテ上告通知書ノ書式ハ左ノ如シ

上告通知書

何裁判所何年何月何日ヲ以テ御裁判相成候處右ハ  
不法之御裁判ト思考候ニ付今般大審院ニ上告致候間此段  
及御通知候也

住所

年月日

何 某 印

何某殿(相手方ノ姓名ヲ記ス)

大審院ハ事實ヲ復審スル處ニアラスシテ只原裁判所ニ差出  
シタル書類并ニ證據物ニツキ法律ノ當否ヲ裁判スル處ナレ  
ハ未タ原裁判所ニ差出サ、ル新タル証憑ハ之ヲ提供スル  
ヲ許カス故ニ證據物等ハ悉皆原裁判所ニ提供シ置キ其提供  
シタル証憑トシテ原裁判所ノ掛官ノ認印ヲ乞ヒ受ケオカサ

控訴上告手續



ル可ラス

第七拾二章 出訴期限

明治六年十一月太政官第三百六拾二號布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ  
 雙方ノ者互ニ受取渡シ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ  
 者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所ニ出訴致シ不苦候處延期ノ  
 勸辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤モノ事  
 ニ付早速出訴致シ候トモ又ハ勸辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任  
 セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勸辨中數多ノ歲月ヲ過去リ  
 出訴致シ候時ハ貸方借方請人証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等  
 ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事  
 柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定メ候條來明治七年一月一日ヨリ後  
 ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自  
 然條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ル可キ者ハ受取ル可キ權利

出訴期限



ヲ失ヒ引渡ス可キ者ハ引渡ス可キ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上裁判不致候此旨布告候事

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人手間代金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等

一 男女藝者ノ揚代金

右ハ六ヶ月限

第二條

- 一 醫師ノ診察及藥料
  - 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
  - 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
  - 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借貸
- 一 小作米金

出訴期限



- 一 証據金
- 一 敷金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料
- 一 養育料
- 一 七ヶ年期マテ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及一生涯ノ年金
- 右ハ五ヶ年限

第四條

一 條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時  
出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一 從前取結タル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約  
期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ

期限ト看做スヘシ又從前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治  
七年一月一日後ニ及フ事件ハ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算  
致スヘキ事

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格  
別ナリトス

明治九年四月司法省第四拾四號達

裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限満期ノ者  
處置方左之通可相心得此旨相達候事

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸  
解不調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フヘシ  
第二條 勸解調ハサル時右滿三十日迄ニ府縣裁判所ニ出訴ヲ爲  
サ、ルニ於テハ其事件ニ付出訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看  
做スヘシ

出訴期限



明治十一年三月十一日司法省丁第九號達裁判執行ノ出訴期限ハ  
出訴期限規則第三條ニ準據シ五ヶ年タルヘシ

(本節ノ法理) 凡ソ民法上人權若クハ物權ヲ有スルモノニシ  
テ幾多ノ時日其權利ヲ實行セサルキハ法律上ノ推測ニ依リ  
既ニ其權利ヲ拋棄シタル者ト見做スヲ經時効則チ期滿得免  
ト云フ期滿得免ノ法ハ何レノ國ノ法律ニモ之ヲ設ケサルハ  
ナシ本邦ノ出訴期限規則ハ乃チ期滿得免法ノ一證ナリ

(本節ノ注意) 出訴期限規則ハ訴訟人ノ須臾モ忘ルヘカラサ  
ル法ナリ世間往々自己ノ利ヲ等閑ニ附シ置キ出訴期限將ニ  
盡キントスルキニ及ヒ狼狽シテ出訴スルモ已ニ出訴期限ヲ  
經過シテ後如何トモ爲スヘカラサルニ至ルコトアリ幸ニシテ  
出訴期限ニハ間ニ合フモ多忙ノ際訴狀ヲ作ルカ爲メニ甚ク  
不完全ノ体ヲ極メ終ニ負公事トナルアリ良シ負ケサルモ

ムグリ) 代言ノ爲メニ此危急ノ場合ニ附ケ込マレテ非常ニ  
高額ノ謝金ヲ貪ホラル、コトアリ故ニ此等ノ邊ニ能ク々々注  
意シ出訴期限ノ盡キサル中ニ充分完全ナル訴狀ヲ調製シテ  
期限數日以前ニ出訴スヘシ

凡テ出訴期限ハ其期限ノ盡クル日ノ午後十二時迄ヲ限リト  
スルコトナレハ尋常ノ訴ノ如ク必シモ裁判所開廷中ニ出訴セ  
サルヘカラスト云フコトアラヌ夜中ニテモ裁判所へ訴出ルキ  
ハ之ヲ受理セラル、ナリ



第七拾三章

負債者失跡後ノ訴訟

明治八年一月太政官第六號布告

民事裁判所負債者失跡後ノ訴訟ハ失跡後三十六ヶ月ノ時間ハ探上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失跡ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所ニ訴出ツ可キ事

第二條 債主未ダ負債者ノ失跡ヲ知ラス定約滿期將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失跡ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨届ケ出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失跡

者所管ノ戸長へ申付失跡ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル證書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續チ爲スヘキ者ニ掛リ此裏書證書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治五年(十一月)第三百六拾二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事



第七拾四章

裁判執行

執行トハ裁判所ノ命令通り執行フノ謂ニシテ例ヘハ金ヲ返セト  
 裁判アレハ則チ金ヲ返シ家ヲ渡セト裁判アレハ則チ家ヲ渡スカ  
 如キチ云フ而シテ執行ハ曲者自ラ之ヲ爲スヘキモノナリトイヘ  
 凡若シモ曲者ニ於テ之ヲ拒ムカ之ヲ怠ルカ其他ノ故障ヲ申立テ  
 執行セサル時ハ直者ハ裁判ノ執行ヲ裁判所ニ求ムヘシ  
 直者ニ於テ裁判所ニ其執行ヲ請願スルニハ執行願書ニ通チ製シ  
 之ニ裁判狀ノ寫及ヒ其裁判ノ依據シタル證據物ノ寫ヲ添エ之ヲ  
 其裁判ヲ爲シタル裁判所ニ呈出スヘシ控訴裁判所ノ裁判ハ其始  
 審ノ裁判ヲ爲シタル裁判所ニ請願スヘシ  
 未タ確定セサル裁判トイヘ凡曲者ニ於テ控訴ノ權ヲ拋棄シタル  
 時ハ之レカ執行ヲ請求スルヲ得ヘシトイヘ凡若シ曲者ニ於テ不

服ヲ唱ヘ控訴届ヲ爲スルハ假令ヒ曲者遂ニ控訴ヲナサハルモ其  
 控訴期限内ハ其執行ヲ停止セサルヲ得ス故ニ執行願ハ其裁判確  
 定シタルキニ於テナスヲ通例ナリトス  
 如此控訴ニ於テハ執行ヲ停止ストイヘ凡上告ニ於テハ全ク執行  
 ヲ停止スルヲ得ス只大審院ニ於テ原裁判ヲ破毀シタル時ノミ執  
 行ヲ停止スヘシ然レ凡外國人ニ關スル裁判ノミハ其執行ヲ停止  
 ス是レ變例ナリ  
 直者ニ於テ裁判ノ執行ヲ裁判所ニ請願スレハ裁判所ハ曲者ヲ召  
 喚シテ之ヲ命ス可シ若シ從ハサルキハ公力ヲ用弁テ之ニ從ハシ  
 ムヘキナリ  
 曲者ニ於テ執行ヲ遂ケ若クハ示談ヲ以テ濟方ヲ爲シタル時ハ其  
 旨ヲ裁判所ニ届ケ出ツヘシ  
 裁判言渡ノ後原被示談ヲ以テ特別ニ濟口ノ方法ヲ契約シタルキ

裁判執行



ハ已ニ其裁判言渡ヲ執行シタル者ト同シク亦裁判所ニ裁判ノ執行ヲ請求シ得ヘカラサルナリ  
裁判執行ノ期限ハ出訴期限第三條ニ依ルヘキモノニシテ其期限ハ五ヶ年ナリトス故ニ此期限内ニナサ、レハ遂ニ裁判ヲ執行ナサシムルノ權利ヲ失フヘシ

第七拾五章 身代限

確定裁判ノ効力ニ依リテ負債ヲ辨償セサル可ラサル義務アル者ニシテ到底其金員ヲ返辨スルノ資力ナキカ若シクハ資力アルモ裁判ニ服從シテ金員ヲ返辨スルコトナサ、ル時ハ裁判所ハ公力ヲ以テ負債者ニ身代限ヲナサシム  
負債者身代限トナリタル時ハ其有スル財産ハ悉ク抵償タルヘキ者ナレハ公賣シテ負債ノ辨償ニ充テサルヘカラス但シ左ニ記載シタル者ハ抵償トシテ差押ユヘカラサル物品ナリトス  
一時服着替共 男女共各 二通宛  
一夜具 同 一通宛  
一本人ノ職業ニ必要ナル物品其價格五拾圓迄  
尤モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者(道具屋ノ類)

身代限



一人宛差出シ外入札入ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ総入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキコ

二 食料一ヶ月分

家族ノ多少ニ應シ一月切用ユル飯米ヲ殘シオクナリ但シ男ハ一日米ナレハ五合麥ヲテハ一升雜穀ナレハ一升五合女ハ一日米ハ四合麥ハ合雜穀ナレハ一升二合ノ割合ヲ以テ殘シオクナリ然レモ如此割合ヲ以テ殘シオクハ只米麥雜穀ノ現在セル時ニ限ルモノニシテ公賣ノ金員中ヲ以テ購求スルノ謂ニアラサルナリ

一 鍋釜及ヒ炊具

各 一通

一 官ヨリ賜リタル勳章ノ類

一 若シ本人公務アルモノハ其公務ニ必用ナル衣冠其他ノ物品以上掲ケタル所ハ通常人ニ關スル者ナリ此故ニ僧侶ニ關スル時

前ニ掲ケタルノ外尙ホ左ノ品々ハ差押ユヘカラサルナリ

一 建物

法用ニ必用ナル箇處

但本堂建添候トモ榮耀ニ属スル箇處ハ此限ニアラス

一 寄附帳ニ記載スル部分

一 什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

ル部分

法衣 寺主並所化及尼共

各一通宛

右ニ示シタル如ク僧侶ハ一種特別ニ抵償スヘカラサル物品ヲ有ス而シテ其抵償スヘカラサル物品ノ區域ハ文字上ニ於テハ紛雜ナキカ如クナレモ實際其區域甚漠然タルヲ免レサルカ故ニ左ノ規則ニ因リテ豫メ之ヲ定メオカサルヘカラス

一 寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田圃反別建造物坪數諸器物

身代限